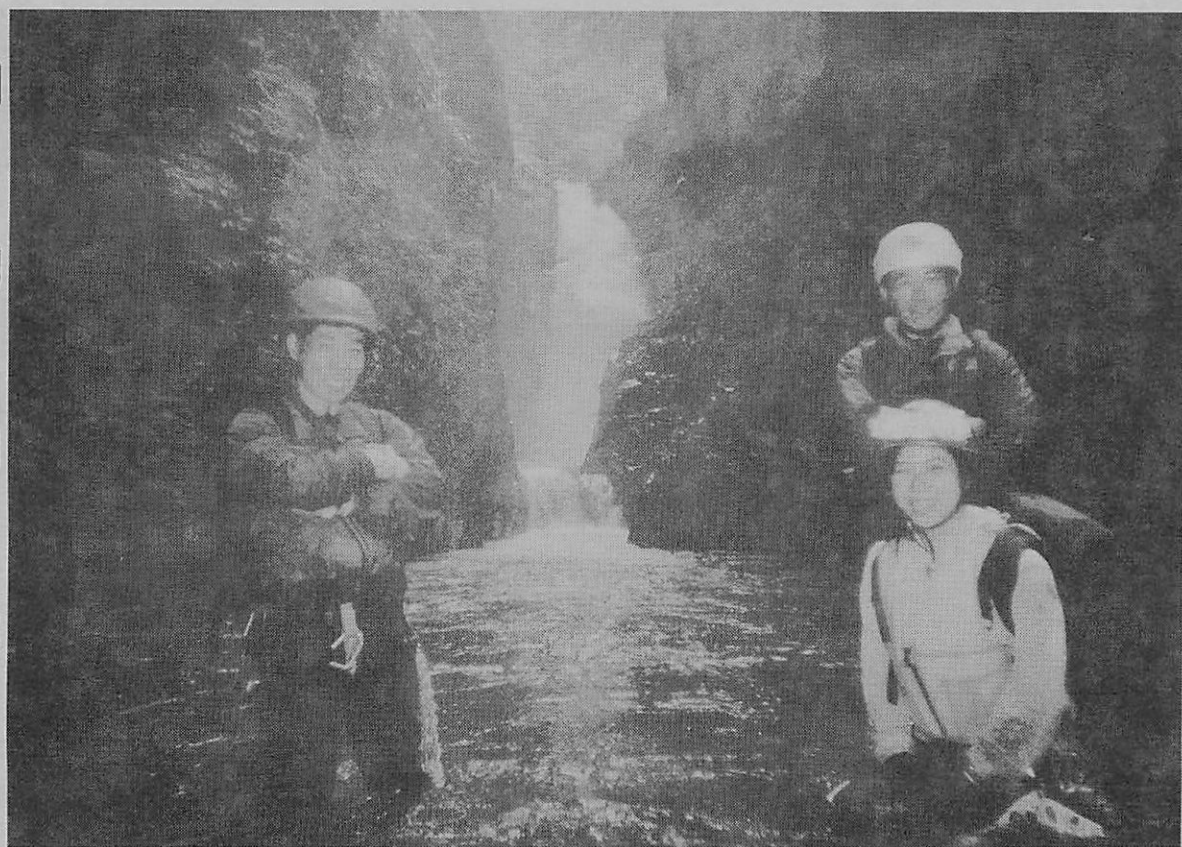


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 38・39号

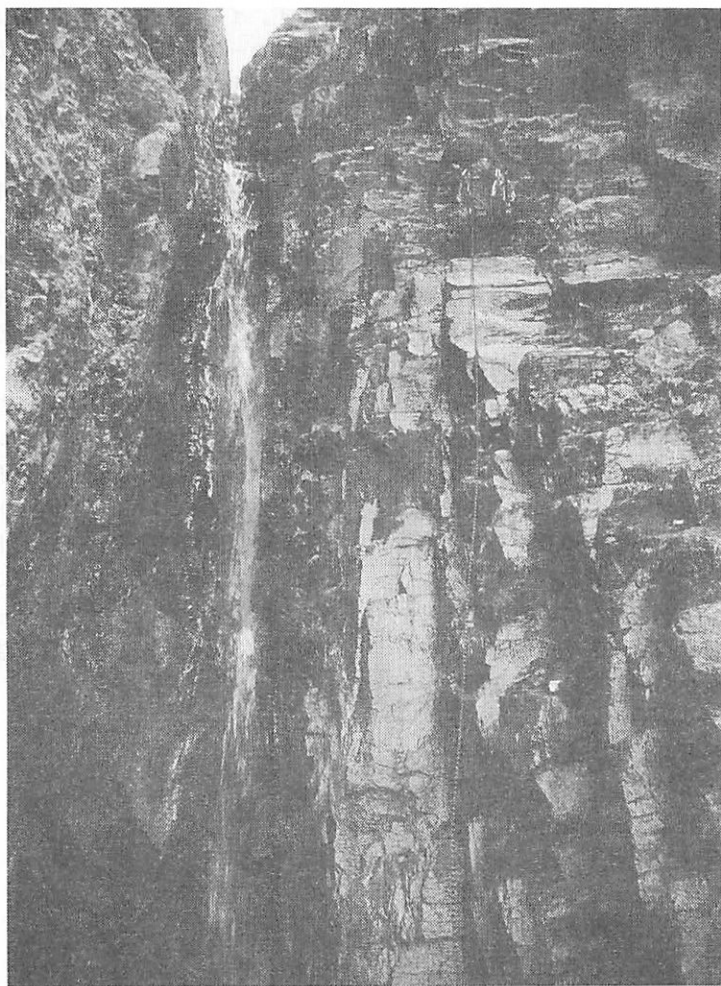
2000年7月~12月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and valley 2000' 夏・秋 No38・No39



岩塔ルンゼの登攀 《Photo by, takakuwa》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

登山とインターネット

昨今ITブームでインターネット人口が急増していると聞く。実は私も今春から自宅でインターネットに接続を始めた1人です。仕事では以前からE-mailを使用しており、その利便性は十分に理解していたので、今春パソコンを自作したのをきっかけにプロバイダーと契約し、自宅からインターネットに接続しています。ACC-Jでもメーリングリストで情報のやり取りをして、集会の補助的役割を果たしていますし、ホームページを開設しています。今の時世、山岳会への入会希望者はホームページを見て入会を希望する者が圧倒的との事。当会でもITブームに乗り、会員の増加を図る為にホームページで情報を発信していますが、現在あまり効果が出ていないのが実情です。ホームページの更新方法を覚えて定期的に更新しないとあまり効果が出ないと聞いたことがあるが、パソコンの前に座っているより山を登ったほうが好きな連中の集団なので止むを得ないが・・・。

しかし、自宅に居ながらにして情報の発信と収集が出来るので、昔と比べると便利になったものである。山関係のメーリングリストも数多くあり、毎夜（毎日）沢山の情報が飛び交っています。以前は活字でしか山関係の情報が得られなかったが、今では自宅のパソコンから様々な情報を得ることが出来て重宝しています。また極端な例ではネットでザイルパートナーを得ることが出来ると聞いたことがある。しかし、あなたはネットで知り得たパートナーとザイルを結べますか？やはり命を託すザイルパートナーは相互に信頼出来る人を選びたいと思います。登攀技術・人格（性格）・等々全然知らない人とザイルを結ぶのにはやはり抵抗がありますし、山ではインターネットより人のネットワークの方を重要視したいと考えます。人のネットワークという面ではもっと岳連がその役目を担っても良いのではないかと思います。例えば茨城県山岳連盟がメーリングリストを開設し岳連加盟団体会員のネットワークを構築すれば、茨城県岳人のコミュニケーションも密になるし、更には遭難対策にも役立つと思います。ACC-J茨城では専用の留守番電話とFAXで山行計画書の提出と下山報告を義務付けていますが、このような事をメーリングリストを利用すれば岳連単位で実行出来るし、岳連加盟団体の動向（山行）が把握出来ると思いますがいかがですか？。またメーリングリストを岳連加盟団体以外にも開放すれば、登山関係者及び一般登山愛好家等も含めたネットワークが構築出来るし、一般登山愛好家が岳連への認識を新たにす

るきっかけになると思います。また、インターネットとは直接関係ありませんがアバランチビーコンの保有率が気になるところです。ACC-J茨城では雪山に入山する者にとって三種の神器（ビーコン・ゾンデ棒・スコップ）は必携品ですが、これも多くの登山者が持ってこそ効果が相乗的に上がると思います。言ってみればビーコンのネットワークが数多く構築出来れば、雪崩による遭難事故が発生した場合でも初期捜索が素早く開始でき、生存して発見出来る率も高くなると思います。インターネットとはちょっと異なりますが、山ではローカルなネットワークが必要な時が多々あります。例えば山で怪我人が出た場合には、その場に居合わせた登山者が協力して怪我人の救出にあたったとか、遭難事故の連絡に登山者のリレーで第1報を素早く通報出来たとか、（昨今携帯電話での連絡が多いらしい）山の中ではローテクノロジーのネットワークが重宝しますが、どちらにせよ山とネットワークは益々密接になってくると思います。本題に戻りますがインターネットで山に関する情報は収集できても、実際に山（岩）を登るのは人間ですし、事前に情報を沢山収集出来ても登攀技術が伴わなければ結果は目に見えています。世の中がハイテクノロジーの時代になっても、クライマーは岩（山）を登る技術の研鑽を怠っては退化するのみです。インターネットで得た情報を活用する為には、同時に登攀技術の向上に努力する事が必要です。この会報が発行される頃には21世紀になっていると思いますが、インターネットで得た情報を参考にしながら21世紀も登山を実践したいと考えております。

（木村 一）

《目次》

2000年 夏・秋号 7月～12月 ACC-J 茨城

巻頭言	(木村) . . .	1
集会報告	. . .	3
山行報告	. . .	4
北丹沢12時間山岳耐久レースに参加して	(佐野) . . .	6
一の倉沢南稜	(吉田) . . .	7
奥秩父・ヌク沢	(笹平) . . .	8
笠堀川・大川	(菊地) . . .	8
川浦溪谷から烏帽子谷	(本図) . . .	10
表丹沢トレーニング山行	(佐野) . . .	11
仙丈ヶ岳	(本図) . . .	12
《コラム》	(鯉河) . . .	13
奥秩父・大常木谷	(笹平) . . .	14
赤石沢	(渡辺) . . .	14
薄根川川場谷	(木村) . . .	16
丹波川本流	(渡辺) . . .	18
一ノ瀬本流	(吉田) . . .	19
白馬岳	(松井) . . .	20
海沢大瀑流帯	(松井) . . .	21
《コラム》	(木村) . . .	22
上越白毛門沢	(木村) . . .	23
小川山	(吉田) . . .	24
槍ヶ岳	(渡辺) . . .	24
川内山塊杉川大杉沢左俣岩塔ルンゼ	(本図) . . .	25
三ツ峠	(渡辺) . . .	28
《コラム》	(渡辺) . . .	29
那須・苦土川井戸沢右俣	(本図) . . .	30
小川山・フリークライミング	(渡辺) . . .	31
阿武隈川・南沢	(渡辺) . . .	31
明星山南壁・左岩稜	(木村) . . .	32
明星山P6東稜	(木村) . . .	33
乾徳山旗立岩クライミング	(本図) . . .	34
天神平スキー場でのビーコン訓練	(佐野) . . .	36
富士山	(渡辺) . . .	36
日光・白根山トレーニング山行	(佐野) . . .	37
八ヶ岳	(吉田) . . .	38
友好山岳団体の月報・会報・その他	. . .	40
編集後記	(生井) . . .	44

表紙…増水のオイラン溺

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 7 月 】-----

7月 5日

出席者 本図、木村、菊地、生井、笹平、渡辺、吉田、佐野

7月26日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、松井、佐野

-----【 8 月 】-----

8月 9日

出席者 本図、木村、菊地、鯉河、笹平、吉田、渡辺

8月23日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、渡辺、吉田、松井、佐野

-----【 9 月 】-----

9月 6日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、松井、佐野

9月20日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺

-----【 10 月 】-----

10月 4日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、渡辺、吉田

10月18日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、渡辺、吉田

-----【 11 月 】-----

11月 1日

出席者 本図、木村、菊地、渡辺

11月15日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、佐野

11月29日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、渡辺、吉田

-----【 12 月 】-----

12月13日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、遠藤、松井、佐野

12月27日

出席者 本図、木村、菊地、笹平、吉田、渡辺、遠藤、佐野

山行報告

《2000年 7月～9月》 No.38号

---【 7月 】---

7月2日	救助訓練	本図、木村、菊地、生井、笹平、吉田、渡辺 水島、名雪、金沢、松原、阿部夫妻、吉田（信） ほか2名
7月9日	榛名黒岩	L本図、笹平、吉田、渡辺
7月16日	丹沢カップレース	佐野
7月16日	南ア仙丈ヶ岳	L本図ほか2名
7月20日	谷川岳一ノ倉沢南稜	L本図、笹平、吉田、渡辺
7月23日	奥秩父笛吹川ヌク沢	L笹平、吉田
7月23日～24日	下田笠堀川大川	L本図、菊地ほか1名
7月30日	秩父川浦溪谷～烏帽子谷	L本図、木村、渡辺、佐野

---【 8月 】---

8月4日～5日	丹沢塔ヶ岳	佐野
8月5日～6日	南ア仙丈ヶ岳	本図、菊地ほか38名
8月6日	奥秩父大常木谷	L笹平、吉田、渡辺
8月12日～16日	南ア赤石沢	L本図、笹平、吉田、渡辺、名雪、松原
8月16日～17日	上州武尊山川場谷	L木村、鯉河、佐野
8月20日	丹波川本流	L本図、吉田、渡辺、ほか1名
8月27日	一ノ瀬川本流	L本図、木村、笹平、吉田、渡辺、ほか1名
8月28日～29日	白馬岳	松井、ほか1名

---【 9月 】---

9月3日	奥多摩海沢	L本図、渡辺、佐野、松井
9月10日	白毛門沢	L木村、笹平、吉田、渡辺、佐野、松井
9月15日	小川山	L笹平、吉田
9月15日～16日	槍ヶ岳	渡辺ほか3名
9月14日～17日	川内杉川岩塔ルンゼ	本図ほか3名
9月23日～24日	三ツ峠	L本図、笹平、吉田、渡辺

山行報告

《2000年 10月～12月》 No.39号

---【 10月 】---

10月1日	那須・井戸沢	本図
10月8～9日	小川山	L 笹平、吉田、渡辺
10月14日	赤谷川きのご観察	L 本図、木村、渡辺
10月22日	那須・阿武隈川南沢	L 本図、渡辺、
10月29日	会津某所きのご研究	本図、渡辺

---【 11月 】---

11月3～4日	明星山南壁左岩稜	L 本図、木村、笹平、渡辺、吉田
〃	P6 東稜	L 本図、木村、笹平、渡辺、吉田、名雪、松原、金沢
11月12日	会津某所きのご研究	L 本図、渡辺
11月19日	乾徳山の岩場	L 本図、渡辺、名雪、松原、金沢
11月23日	古賀志山	L 本図、笹平、渡辺、他1名
11月26日	お岩山アイゼントレ	L 本図、木村、渡辺、佐野

---【 12月 】---

12月2日	谷川岳ピーコン訓練	L 本図、渡辺、佐野、松井
12月16～17日	富士山	L 本図、木村、遠藤、渡辺、佐野
12月22日	日光白根山	佐野
12月23～24日	八ヶ岳ジョウゴ沢	L 本図、吉田、松井
〃	裏同心ルンゼ	L 本図、吉田、松井
12月30日～	北ア・横尾尾根	L 笹平、本図、渡辺、佐野
12月30日～	八ヶ岳西面	L 木村、鯉河、遠藤、名雪、松原、金沢、水島

北丹沢 12 時間山岳耐久レースに参加して

2000. 7. 16

パーティ 佐野尚史

7月16日(日)「第2回北丹沢12時間山岳耐久レース」に参加しました。参加するに際しては、「どんなレース?」「何人くらい参加するのか?」等ほとんどなんの予備知識もありませんでした。それらのことよりも、とにかく今回参加の目的は「ゴールする体力(精神力)があるか否か?の確認」と「更なる体力向上」でした。制限時間内のゴールを目標に参加を決めました。したがって、参加する多くの人がするように「走る」ということは一切せずに、「歩き」通そうと最初から考えていました。とは言いつつも、いきなり本番で数十キロを歩くのはやはり不安がありましたので、これに先んじてこと2週間、レースの予行演習を兼ねて勤務地である東京・原宿から自宅のある龍ヶ崎市までの55キロ(実際どれくらいあったのかは定かではありませんが)を歩いて帰宅することにしました。当初予定では7~8時間で着くのではないかと考えていましたが、実際には12時間強かかってしまい、龍ヶ崎市到着は朝の5時過ぎ、足はまめだらけの惨憺たるものでした。「とりあえず歩き通すことはできた」という予行演習の実績だけを拠り所に2週間後の参加となりました。実際のレースのコースは、スタートおよびゴールが津久井町の青根中学校。まずは神ノ川沿いを舗装された林道伝いに神ノ川ヒュッテまでほとんど平坦な道を距離約8.3キロ、標高差130メートル。ここからいよいよ山道に入り大室山山頂まで一気の上りが標高差1000メートル、距離4キロ。いったん犬越路までの下りが500メートル、距離3キロ、再度若干の上り下りはあるものの松洞丸までの上りが550メートル距離、4.2キロ。神ノ川乗越まで距離2.5キロを300メートル下り、またまた上り下りを繰り返して距離3.5キロ標高差、340メートルで蛭ヶ岳山頂。最後は山頂より約10キロ標高差1150メートルの下りが続きスタート地点に戻るという合計走(歩)行距離35.5キロのレースです。スタート直後から「走る人」と私のように「歩く人」とが二分しているようでした。朝のうちは曇り空が広がっていて、「これならばさほどばてないのでは!?!」と思っていましたが、1時間もすると一気に夏空が広がり始め、2週間前の予行演習「疲れ」が俄かに出てきてしまいました。

おおむね1時間毎に休憩を取るというペースは蛭ヶ岳山頂までは崩さずに歩き続けました。今回のコースでは「大室山」「松洞丸」「蛭ヶ岳」への上り3本、特に、2つ目の「松洞丸」への上りと最後の10キロの下りが非常(異様)にキツく感じられました。「松洞丸」への上りでは、ほぼ南中時刻と重なり暑さが厳しく、これを

越えてもピークはもう一つあるというプレッシャーのために、また、最後の下りではそれまでの体力的な消耗とこれでもかこれでもかと延々と続く坂道に嫌気が差してのキツさでした。最後は、何とか制限時間である12時間以内でのゴールをすることはできました。

最終的な私の結果はというと、記録は「10時間40分15秒」で総合順位は「438位」でした。最終的に何人がゴールしたのかは、最終ランナー(制限時間内の)が到着するのを待たずに会場を後にしましたのでわかりませんが…。

来年以降は今回の記録がありますので、それを超えるという目標を掲げて参加をしたいと思っています。

(佐野 記)

一ノ倉沢南稜

2000. 7. 20

パーティ L 本図一統、笹平孝、渡辺聡子、吉田仁

南稜にトライするのは、今回で三回目だ。前回はいずれも雨のため出合にて敗退（撤退と言うべきか？）。今回は、3度目の正直となるのでしょうか。谷川に向かう道中『明日は、新人二人にオールドトップを引かせるか』と、隊長。『別にかまいませんけどつるべの方がいいんじゃないんですか？やっぱアルパインはスピードが命ですし。』と、オレ。かなり調子こいた発言である。10年前なら体育館の裏に呼び出されてヤキを入れられてもおかしくない。そんな強気な発言もテールリッジを登っている時に吹き飛んじまった。別に壁に圧倒された訳じゃない、岩が濡れているのだ。いくらシューマッハだってwetな路面に、スリックタイヤじゃ突っ込まないでしょう。じゃあ～溝があれば、行くのかって言われてもオレは、いやだけど。南稜テラスに到着するが、依然状況に変化無し。ジン、笹平君、渡辺、本図隊長のパーティに別れオレがトップで登り出す。easyな3級のピッチだけど、しけているのでスリップに注意しながら行く。いったんチムニーの手前でピッチを切って、セカンドを

ビレー。チムニーの先は、本来なら快適なクライミングが、楽しめる所だろうけどやっぱりここも濡れているので慎重に行く。そして草付きからフェイスを回り込んで馬の背リッジに。唯一ここは、乾いていて快適にロープをのばせた所だ。これなら、最後の核心のピッチは、乾いているかと、期待していたが、がっかりビショビショもいい所、下に入ると水滴が落ちてくる程だ。ほんとに、ここを登んのかって感じ。でもここまで来たんだから行くしかないでしょう。もちろんAOで！もう、もってきたquickdrawの大判振る舞い。打ってあるハーケンに全部クリップして安全第一で登る。ビレー点に着いた時には、ほんとホッとしました。あ～乾いている時に登りたかったゾー。

（吉田 記）



チムニーの登攀

奥秩父 ヌク沢

2000. 7. 23

パーティ L 笹平孝、吉田仁

吉田さんに家まで来てもらって、16号線で行くことになった。西沢溪谷の駐車場で仮眠をする。朝になると駐車場にたくさん車があり驚いた。さっそく林道を歩くと、周りにちらほらとタオルが木にぶら下がっている。何の意味があるのか考えていると、ヌク沢の橋に着く。やけに水量が少ない沢なので、この先どうなるか心配になった。

これと言って難しい所も無く、登って行く。しかし、途中にある堰堤越えが意外と苦勞させられる。足元の不安定な所を高巻いて、少し行くとまた高巻いてと言った感じで、とても快適とは言えなかった。二俣の所で休もうと思っていたが、堰堤が増えたらしく見過ごしてしまい、気が付いたら奥の二俣まで来ていた。大滝が近づくと、いい感じのナメ滝が現れ始め、気分も良くなる。大滝に着くと、その大きさには圧倒させられた。

1段目は、右側のブッシュ沿いに行き、途中から水流に移り、上部で左側にトラバースして行く。

2段目は少し迷って、左側から取り付く。シャワーを浴びながら右上して、上部は右側に行く。

3段目は、右側の所をシャワーを浴びながら、直登

して行く。

大滝を越えると沢も穏やかになり、しばらくするとガレ場となる。ここをひと登りすると稜線に出る。近くにある甲武信岳は、100名山なので行こうか悩んだが、次回行く事にした。戸渡尾根を降りて、白い石が沢山ある採掘場跡を通り下山した。

駐車場(7:00)ー奥の二俣(10:20)ー大滝の上(11:30)ー稜線(12:50)ー駐車場(16:00)

(笹平 記)

笠堀川・大川

2000. 7. 23~24

パーティ L 本図一統、三瓶勝利、菊地光夫

夏もいよいよ本番で一年中で最も沢遊びの楽しい季節の到来である。ウォータークライミングが出来て、イワナ釣りをかねた沢をリクエストするとM氏が選んだ沢は、大川だった。大川は笠堀川の本流筋となる溪でそれなりに風格もあり、砥沢川と似たタイプの溪である。

今回のメンバーは本図氏、三瓶氏、菊地の3名である。竜ヶ崎市に住まいを持つ釣りキチ三瓶氏を交えての山行である。余談ではありますが、彼には1年中お世話になっています。それは私の仕事の受け持ちが竜ヶ崎市を担当してまして、暇を見つけてはいつも足が彼のお店へと向かってしまい、コーヒーを入れてもらっているからです。日中はコーヒーだが夕方など仕事を終えた後よると、

『あっ、いいところに来た。一杯やってけよ』と言ってくれるタイプで、そこは勤務中ですのでと言いが

らもしっかりとよばれていきます。

茨城から笠堀ダムまでは非常に遠く土浦より高速を利用して安田インターでおりる。後は一般道で笠堀ダムを目指して車を進める。ダムは小さな観光地になっており、数台の駐車場がある。この付近はニホンカモシカの数も多く見られる所である。大川への入渓はダムサイドに続く細い道を約2時間半位歩く。途中マムシがいたがへびの扱いの上手な三瓶氏が適当におっばらう。ここ辺りはダムサイドの日当たりの良い所にはマムシが多くいるそうです。

ダムのバックウォーター上部で光来出沢と大川の交わる所を目標に斜面を降りる。沢の上部には石段が見えてその上のほうに鉄塔が見え、これはアメダスの雨量計である。沢に降りると周囲の山に滝音を響かせて大川の音滝が現われた。この滝がダム湖産のイワナの遡上止めである。音滝を巻き滝の上部より溪に降りる

と直ぐに第一の難関が現われ、早速M氏が泳ぎ、次へと越していく。水は雪解け水で冷たいが7月中旬なので日中は大丈夫である。水量も多くゴルジュ帯の連続で泳ぎ泳ぎで越していく沢である。出合より数えて2回目の高巻きは急な崖のような所でザイルを出し越えていく。その時の条件によっては高巻きルートも変わるので的確なるルートファインディング技術が要求される。

次にワシオ沢出合付近で第2の難関が待っている。ここは大川最大の難所で泳ぎでの突破するのは相当な泳力とパワーを要する。又右岸の高巻き後、ここにはフィクスロープがあった。が、これがいつ切れてもおかしくないロープで、それに荷重をかけずにダマシダマシ下降した。だがあると便利ではあった。その後の渓はゴルジュ帯ながら遡行も幾らか楽になり、ワシオ沢の出合となる。現着後、ビバークサイトを決め整地して、各自竿を持ちM氏がワシオ沢へS氏が小又川出合の方へ、Kが下の方へと出かけること約2時間。M氏もS氏も数匹づつ上げてきたので今夜の酒の肴には十分であった。塩焼き、刺身、骨酒用として食べた。辺りはすっかり夕闇が広がり焚火の煙が目染みて、深山幽谷の感じがして感無量のひと時であった。ビールも十分あり、会話にも花がさき楽しかった。

翌日は起きると即く、竿を持ち目の前で釣りキチ三瓶氏が尺に近いイワナを2匹立てつづにあげる。M氏は腹が減ったと言っは、そのイワナを刺身にしてアラは味噌汁にして昨夜の夕飯に味噌汁をぶっかけて一杯食べてから竿を出して出ていった。1時間後くらいには戻って来たが形が小さいとの事で形の良さそうないわなだけを

持ち帰り後はすべてリリースしたとの事。ワシオ沢の方面も小又川出合の方も大量の雪渓が残っており、S氏などは戻る途中、頭の後方でドドンと言う大きな音がしてブリッジが崩壊したのかなと思いつつ戻ってきた。その後3人で朝食を取り3人で小又川方面のイワナのポイントポイントで交代で竿を出し何匹か上げたがすべてリリースした。天気も良く十分楽しんだ後下る事にする。下りは水の流れに身を任せラッコ泳法が最高で時々足をぶつけるが、あっと言う間に光来出沢の出合に着く。だがまだ天気が不安定の為、山に雨雲がかかり夕立の感じがしたが降られる事もなくダムサイドの駐車場に到着した。

大川の評価としては、イワナの色も濃く泳ぎもあり技術も必要な沢なので良かった。

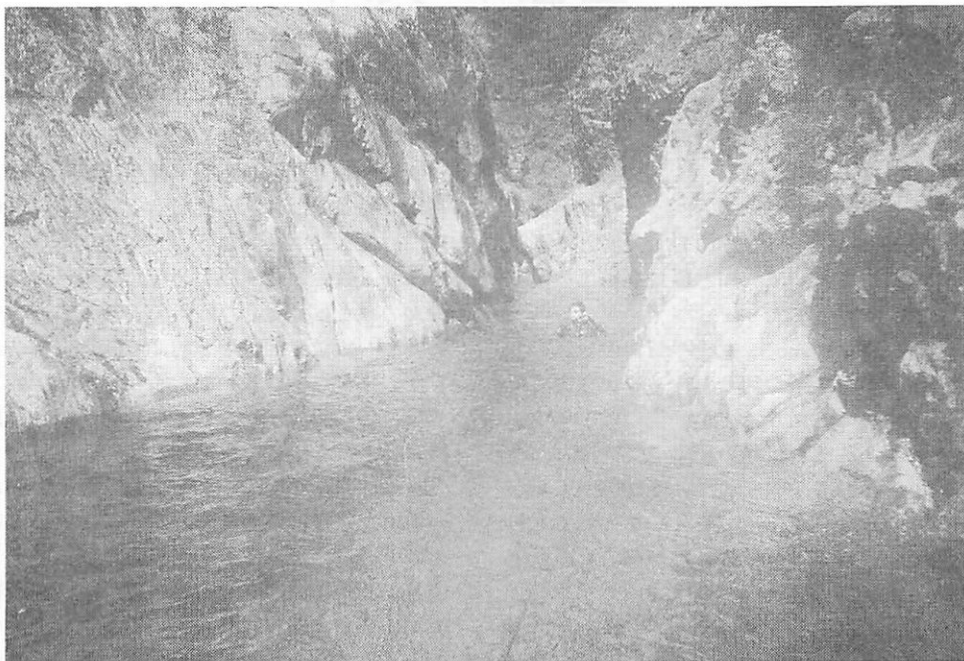
7/23

笠掘ダム(6:19)ー大川出合(9:07)ー小又谷出合(15:18)

7/24

小又谷出合(11:23)ー笠掘ダム(16:25)

(菊地 記)



ゴルジュを泳ぐ三瓶氏

川浦溪谷から烏帽子谷

2000. 7. 30

パーティ L 本図一統、木村一、渡辺聡子、佐野尚史

梅雨も明け、連日猛暑が続く今日この頃、山に行くに
もちと暑すぎると思いませんか皆様。こんなときはウォー
タークライミングに限るんですよ。渡辺お嬢様は、先日
名誉の負傷をなされて、具合はまだダメだとおっしゃっ
ているし、佐野先生はまだ人会されたばかりで、海のも
のとも山のものとも分かりません。こんなことから、易
しくて少し泳げて、尚且つ滝登りもできる所、という欲
張りな要求を満足してくれる沢を探したわけなんです。
なんせお嬢様が片手で登れるところといたら、そうめ
たらやたらにあるわけではないのです。そうそう去年、
俺、古山、吉田で行ったものの雨で敗退した谷にしよう
ということになり、この計画が作られたのであります。

今日はお嬢様の愛車オルティアで行くことにしました。
俺のデリカ号とは違って快調な走りです。去年ビバーク
した屋根付舞台のあずま屋に着くと、なんか昨年と感じ
が違います。みこしが置いてあり夏祭りのようで、とて
もビバークなんぞできる雰囲気ではありません。しかた
なくキャンプ場の駐車場に移動し、シートを敷き一杯やっ
てごろ寝をきめこみました。お嬢様はなんと用意のいい
ことでしょう、蚊取り線香まで持参してきたではないで
すか。おかげで一部の騒音（犯人は誰ですか？）はあっ
たものの、ゆっくりと寝ることができました。

日が昇ってくると暑くて早々に目が覚めてしまいまし
た。キャンプ場のお客様たちは、とっくから朝食の準備

にとりかかっているようで賑やかです。途中にあった名
水「タマゴ水」ってどこが名水なんですか？ゴミだらけ
で汚く、傍らにはドバミミズの死骸もあって、とても飲
む気になれない代物じゃないですか。鮎物でも混じって
いるのでしょうか？なんか変な匂いもするような、白く
濁っているような？？？

沢は水量の少ないのがちょっと物足りない感じです。
第一ゴルジュは泳いで突破です。突破？ウー……突破
というほどの手ごたえはないですねえ。突っ張りで通過
するものの押し戻されるほど水勢は強くないし。一応
ザイルを使いましたが、お嬢様も佐野先生も必要ないとい
った顔で登ってきました。トボに書いてある通りフィ
ックスがあったけど、今日の水量では使う必要はなかつ
たですね。

鞍掛ノ滝出合の上だったか下だったか忘れましたが、
3m位の滝を登ろうと釜を泳ぎ取り付いてみたけど、ホ
ールドスタンス共に無くて、スカイフックもセットでき
ず、ハーケンも打てず、かなりねばったが登れませんでした。
ここがこのルートの核心部と思われるのですが、
トボにはこの滝についての記述はなにもないんです。書
くのを忘れたのでしょうか？

やがて平凡な流れになったので、左岸の林道に上がり
烏帽子谷出合の橋まで行きました。ここで大休止して冷
や麦を食べることにしました。旨いの一言で、6人分の



ゴルジュを泳ぐ

量はあっという間に4人の胃袋に消えていきました。

泳ぎの部は午前中終了したので午後は滝登りの部です。烏帽子谷は、ほとんどの滝が直登できて楽しい沢です。最近、烏帽子谷を紹介しているトボは少なくて、溪相が変わってしまったのかなと心配しましたが、そんなこともなく初心者には良い沢でありました。お嬢様は手の痛みが強そうで、時々「いて！」とか「いたた！」とか言葉を出し、辛そうに見えるのですが、それよりも登りたいという気持ちがつよいので、来たことに後悔している様子はありませんでした。根性があるというか、彼女も山キチの部類に入る人間であることを再確認しました。佐野先生はというと、登山を始めたキッカケは、体調を崩して運動のためにということでしたが、ガッシ

りした体格と、ガシガシと登る勇姿には、とても初心者とは思えませんでした。

右岸の林道が近くなると沢底も荒れてきてやがて林道に出ました。ここから矢岳への登山道があるらしく小さな指道標がたっていました。この先はヤブっぽく平凡そうなので廻行はここで打ち切り、長い林道歩きで車に戻って本日の山行を終了しました。

キャンプ場(8:00頃?)—烏帽子谷出合の橋(12:18)—烏帽子谷終了(14:08)—キャンプ場(16:58)

(本図 記)

表丹沢トレーニング山行

2000. 8. 4~5

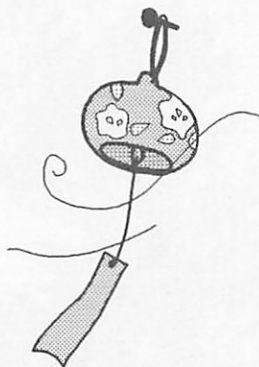
パーティ 佐野尚史

8月4日・5日と女房の実家のある秦野に行くついでに(というのも変ですが)、丹沢表尾根へとトレーニング山行に行ってきました。

3日(金)夜、仕事を終え帰宅後に家族4人で龍ヶ崎市の自宅を出発。途中、週末のためか若干の渋滞があったもののほぼ予定通り深夜12過ぎに大倉の駐車場に到着。そこで家族とは別れ一人駐車場にて野宿。8月最初の週末ということもあってか、なんだか辺りは騒がしい。若い連中がキャンプをやっているらしい。うとうとするとすぐに人の気配。そんなことを繰り返しながらも何とか眠り、4時半には起き、5時過ぎに行動開始。まずは大倉尾根をひたすら塔ノ岳へと歩き出す。観音茶屋、見晴茶屋、駒止茶屋、花立茶屋と多すぎる気もする小屋を通り過ぎ、8時前に塔ノ岳山頂に。目の前には富士山。まださほど暑さは感じず気分は最高。しかし、天気を見

る限りかなりの暑さを予感させる。しばらく休憩した後、新大日ノ頭、行者ガ岳、烏尾山、三ノ塔、二ノ塔を過ぎ富士見山荘手前を菩提峠へと向かい岳ノ台を経由しヤビツ峠へ。もうこのころには真夏の日差しがガンガン照りつけ、標高もさほど高くないので汗だくの歩行となりました。ヤビツ峠から更に蓑毛へと向かいトレーニング山行は終了。真夏の丹沢、汗をかくにはもってこいでした。

(佐野 記)



仙丈ヶ岳

2000. 8. 5~6

パーティ 菊地光夫、本園一統、ほか40名

去年に続いて八郷町登山教室の講師を頼まれての登山である。菊地も去年に引き続き依頼された。すでに私と坂入さん（役場の職員）で7月16日に下見山行は終わっており山小屋の予約も済んでいる。去年の赤岳と比べると危険箇所も無く、案外楽に3000m峰に立てる山だと思う。

8月5日。朝5時に八郷町役場を出発する。ところが去年にも増して高速道路の混雑が激しく、首都高堤通から渋滞が始まってしまった。2~3m進んでは停まりの状態で、6時間以上かけてやっと石川パーキングエリアに着く。しかしバスを停める場所がなく、はるか先に路停して歩いてパーキングエリアへ。もうニッチもサッチもいかない大変な混雑で、女性は男子トイレを使って用を済ませる。山に登る前から疲れてしまった。山で食べるはずの昼弁当をバスの中で食べるハメに。やっとのことで長谷村に着いたのは午後4時であった。すぐに臨時の村営バスに乗り換えて北沢峠へ。

登山口を出たのはなんと5時10分前であった。皆さんに懐中電灯の準備をしておくことと、すでに下見はしてあるので暗くなってもコースの心配はないことを伝える。こういうときは生徒たちに不安を与えてはならないのが原則だ。生徒の年齢構成は、1/3が75歳を筆頭に60歳以上、1/3が50歳台、残りの1/3が40歳台と少しの若者といったところだ。自分勝手な行動を

する者はいなくて助かる。天気はあいにくの雷雨模様で、このとき私の頭の中では、今日の宿泊地である馬の背ヒュッテに着くまでには暗くなってしまうだろうと予測していたが、今年の参加者の半分以上は去年の経験者であり、雨の降る中、皆さん快調なペースで歩いてくれて明るいうちに小屋に着くことができた。まずは一安心である。

小屋はかなり混雑していたが、一畳二人というほどではなかった。去年の赤岳鉱泉と比べると部屋は狭いし食事もお粗末、それに食事の時間までは食堂に入ってはいけないというし、部屋での飲食は厳禁だというし、まったく良いところがない。盛りっきりのカレーを食べたらやることないので寝るしかない。まったく健康的な山小屋だった。ここはもともと評判のよくない小屋だが、山小屋ってどこでもこんなものなのだろうか。私は声を大にして「馬の背ヒュッテは良くないので利用するな」と言いたい。今まで私が利用した小屋の中では一番居心地の悪い小屋であった（少々感情的になっているかも俺）。

この日、珍しい光景を見たので報告しておく。それは、ミミズ（ドバミミズ）と軟体動物（名前はわからないがヒルの一種か？）の追いかっけである。ミミズも軟体動物もすごく機敏な動きをみせている。ミミズは明らかに軟体動物を避けて逃げており、ミミズにも目があるのだろうかと思わせるような動きである。軟体動物なんか



頂上での記念撮影

ジャンプまでして追いかけている。その時は登山者にも踏まれて苦しんでいるのかと思ったが、すぐそのあと同じ光景を見つけた。今度は軟体動物がミミズに巻き付き食べようとしているのだった。ミミズは軟体動物の餌だったのである。軟体動物の大きさはドバミミズと同じかもっと大きいだろうか、背は黒っぽく腹はオレンジ色で不気味な生き物である。頭の部分は三角形に大きく膨らんでいたように記憶しているが、読者の皆様でこの軟体動物の名前を知っている方がおりましたら本図 (Tel 0299-43-0115, Fax 0299-43-3115) に教えていただければ幸いです。

8月6日。早朝暗いうちから出発準備である。この山小屋の朝食は、前夜おにぎりにしてお客に渡してあり、行動中に食べてもいいし、小屋の食堂で食べる人にはみそ汁を出すという、なんとも侘しさを感ぜさせるものであった。

でも天気は最高で雲一つない快晴だ。一日目雨で2日目晴れなんて去年の八ヶ岳と同じである。今回初講師の吉田さんも生徒の皆さんも体調が良さそうで一班から順次出発する。高山植物も多く、目を楽ませてくれる。早速一夜づけの知識を披露しようとするが、なさけないことに半分以上忘れてしまった。ご来光でも拝むのに早朝出発したのだろうか、既に頂上には多くの人が見える。仙丈小屋前で小休止する。仙丈小屋は新築されたばかりの風力発電とソーラーシステムの快適そうな山小屋だが、食事は出ない素泊まりのみとのこと。参加者の様子を見回って歩くと調子の悪そうな人はいないようだ。森林限界を過ぎたので景色も良く清々しい朝だ。そこから一登りで頂上に着いた。昼飯には早いので記念撮影やら山座同定などをしながら一時を過ごす。参加者の満足そうな

顔を見ると来て良かったと思うのは去年と同じである。

この登山教室の為に休日を3日潰すわけだが、もったいない気持ちがすることも正直なところ。貴重な休日は自分の山行に使いたいというのが本心である。でも安全登山を普及させるのに少しでもお役に立てれば光栄というもの。世の中には今でも「登山なんて生産性のない反社会的行為」と思っている輩もいるのだから。以前は「山なんか登ってどこがいいの？」なんてよく聞かれたものだが、さすが最近はそんなこと言うやつはいなくなった。それは中高年の登山ブームのせいでもあろうし、私が歳をとったので言いにくくなっただけで、決して（登山に批判的な奴が）いなくなったわけではないだろう。

下降は北沢峠に向かう尾根を下る。途中、ギターを背負った4～5人の若人と会った。だれかが「一曲お願いします」と言ったら本当に雲上ライブを初めてしまった。だれかが「ありがとう」と千円札を差し出すと「いりませんよ」と断っているようだったが、出したものは引込められないからと無理に受け取ってもらったようだ。気持ちの良い若人たちと別れ、いやに長く感じる尾根を北沢峠に降りた。すると村営バスが待っておりすぐに乗ることができた。

保養センター仙流荘で風呂に入り、帰りのバスではカラオケ大会だ。私も一曲やらさせられたが、どうも歌は苦手である。

馬の背ヒュッテ (7:26) - 頂上 (11:15~11:36) - 北沢峠 (14:30)

(本図 記)

《コラム》

会の代表を退き2年が過ぎ、ますます幽霊会員になりつつある昨今である。会の代表の時は、会の合宿の時など会員が入山している間は、下山の電話がくるまでは何かと心配していたことが多くあった。

現在は、誰がどこへ行くのが心配する事無く気楽な一会員となっている。そんなオレにも一つだけ気になる事がある。それはオレが茨城岳連の理事をしていた時（5年前か？）の理事会で、民主党のK氏を岳連の顧問にした事である。その時の理事会で、理事長からK氏を顧問にしたいと提案があり、理由は高校総体が何年後にあるので、K代議士の力を借りたいとの事であった。オレは山屋の世界では政治の力などいらぬし、政党の看板をかかげた者を顧問にすれば、岳連が政治に翻弄されるおそれがあると思い、反対の意見を述べ、どうしても顧問が必要なら政治色のない人をお願いしたらと言ったがだめだった。反対意見を言ったのもオレ一人だった。心の中では最後まで反対だったが、オレ一人ではどうにもならないし、岳連には当会もお世話になっている部分もあるので最後はオレも賛成した。

あれから5年、なんで今頃こんなこと書くかという、K氏が出馬する参議院選挙があるからである。岳連の幹部の行動次第では政治に巻き込まれてしまうような気がするが、年越し苦労であってほしいものだ。

鯉河仁志

奥秩父 大常木谷

2000. 8. 6

パーティ L 笹平孝、渡辺聡子、吉田仁

今回も家まで来てもらう。今まで奥多摩から先は行った事が無く、奥多摩湖を通るのは始めてだった。夜中は、走り屋が多くて途中、警察がねずみ取りをしていたのには驚いた。切り通し地点の手前にある広い駐車場に車を止めて仮眠した。

切り通し地点から急な斜面を下降して、一ノ瀬川に入る。すぐ後ろから他のパーティが降りて来て上流に向かったが、ルート図だと大常木谷は下流にあるので、一ノ瀬川を下った。するとゴルジュが見えたので、実際は切り通し地点の手前から降りてしまった事にきずく。さっきの所に引き返して上流に向かうと、大きな淵が出て来た。深そうな淵なので、一番泳ぎが上手い渡辺さんがロープを付けて泳いで行く。しかし、半分を過ぎた所で力尽きた。浮き沈みする渡辺さんを、二人とも必死になって引き寄せた。とにかくここを突破しないと大常木谷に行けないので、どうしようか迷っていたら、恐ろしく急な斜面に高巻きの道があるのを見つけ、淵を高巻くことが出来た。そして、大常木谷出合に着くだけでほっとする。時間をロスしたので、この先は急ぎ足で行く。途中にバックした跡があり、まだ焚き火の煙が出ていた。千苦ノ滝に来ると、先行パーティが上部を高巻いているのが見えた。良く見るとやたらと人数がいるので驚いた。山女魚淵で先行パーティに追いつき、順番待ちになる。ヘルメットに茨城県と書いてあるのが見えて、声をかけるとおちこち山の会の人達で、7人くらいのパーティで

ても賑やかだった。山女魚淵は、シュリンゲがぶら下がっていたので泳がずに通過する。ここを過ぎた所で、先に行かせてもらう。特に悪い所も無く、順調に進んで行き、もう1パーティ抜いて行く。不動ノ滝の上段は時間がかかりそうなので、左側から高巻く。河原を過ぎると大常木林道が横断している会所小屋に着く。ここでエスケープするか悩んだが、先に進むことにする。すぐに雨が降り出し始めた。そのうち雨の勢いが強くなってきたので、カッパを着て先を急いだ。特に悪い所も無く、やがてガレた沢になり、登山道の橋に出る。雨は止んだが、濁った水が上から流れていた。下降は、ここから歩きやすい登山道を将監小屋へ向かう。将監小屋からは林道になり、この林道は工事中らしく、工事車両が何台か止まっていた。道路に出た所から駐車場までかなり距離があるので、自転車などをデポした方が便利そうだった。

駐車場(8:00)→大常木谷出合(8:40)→会所小屋(12:40)
→登山道(14:10)→将監小屋(15:00)→駐車場(17:00)

(笹平 記)

赤石沢

2000. 8. 12~15

パーティ L 本園一統、笹平 孝、吉田 仁、渡辺聡子(ACCJ-茨城)
名雪博二、松原丈夫(ACCJ-東京)

田舎に生まれ田舎に育った私にとって、お盆とお正月に毎回テレビで放送される高速道路の混雑ぶりは不思議でなりませんでした。どうして混むとわかっていながらわざわざ出かけるのでしょうか。そんな時は家でおとなしくして、空いている時に出かければいいのといつも思っていました。その頃はよもや数年後自分がお盆に渋滞のど真ん中で往生する事になるなんて想像だにませんでした。テレビの中の出来事でしかなかった事が目の前で起き、しかも自分の身にふりかかっています。車は遅々として進まず、アクセルを踏んだ次の瞬間ブレーキを踏むという動作を何度繰り返した事でしょう。こんな調子で朝までに畑窪ダムまでたどり着けるのでしょ

う。しかし、かなりの時間はかかったもののようやく富士川パーキングまでたどり着けました。につっき東名高速ともじきにお別れです。ここで車にエサをあげ、運転を代わってもらったとたんに気を失い、次に目を覚ましたときには1年ぶりの畑窪ダムでした。茨城を出発してから10時間、ようやく到着です。さわら島までの送迎バスに入渓地点である牛首峠で降りしてもらいました。峠には「赤石沢」と矢印のかかれた大きな看板がかかっており、沢への降り口は立派な階段がつけられています。今年も近づいてくる台風におびえながらの入渓となってしまいました。雨が降り出すのが少しでも遅くなることを祈りながらの歩き出しです。それでも臨時バスが運行

してくれたので予定よりも1時間ほど早く遡行を始めることが出来、ちょっと余裕が持っています。赤石沢の水量は非常に少なく、イワナ淵も腰上までの水量とはほど遠いものでした。気付いたらいつの間にかニエ淵に入っていたようで、目の前に大きな釜が現れました。まず本図さんが空身で右岸に沿って泳ぎ、私たちをロープで引っ張ってくれます。毎度のことですがロープに引かれて泳ぐのは安心、楽ちんで大好きです。その後はロープを出すこともなく進み、“最悪の5m”と書いてある滝には左岸に残置のシュリンゲがありこも問題なく進めました。「これが神の淵かなあ。」「これが虹の淵だね」と話しながら進むと沢に似つかわしくない人工物、取水堰堤が見えてきました。「あれ？もう堰堤に来ちゃったよ〜。」とみなさんちょっと拍子抜けのようです。堰堤をこえ、北沢出合まで来るとナイスなテン場がありました。あまりに早い時間ですがここで本日の行動を終了とすることにして、寝床の作成、焚き火の準備、おつまみ調達とそれぞれ分担し、あっと言う間に立派なホテルの建設が終了し山ほどの薪が集まりました。その後、来るべき台風に備えてエスケープルートとなる仕事道を探しに出かけましたが結局見つけることが出来ませんでした。最悪の時には藪をかきわけて逃げるしかないようです。万が一のために逃げ道にロープを張って一安心。その後みんなで釣りに出かけましたが、茨城チームは全員坊主でした。東京のお二人は期待を裏切ること無くイワナを釣り上げてくださり、この晩はおいしいイワナをいただくことが出来ました。

夜に雨がバラつきましたが恐れていた台風が襲来することは無く、この日も歩き出しはうす曇の天気です。堰堤よりも上流なので水量は昨日よりも多いのですが、流れはさほど急ではなく快適です。門の滝はとても深そうな釜を持っており、迷わず右岸を巻きました。後日「日本百名谷」を見ていたら、水流右を直登できると書いてあるではありませんか。ちょっと損をした気分です。大ガランを過ぎると、やってきました赤石の淵。日が射していればもっともっと奇麗なのでしょうが、それでも十分な美しさでした。記念にとラジオラリアのかけらをポケットにしのばせます。さらに進んで大ゴルジュの入口に来た頃雨が降り出してきてしまいました。なんでもこの大ゴルジュの中は未踏だそうで本図さんは興味津々の様でした。もしかしたらそのうちに大ゴルジュを踏破するためにまた行こう、と言い出すかもしれません。私はこの大高巻きが無事に終わることが出来るかどうかがとても心配でした。私が恐々と足を進めていたころ、他の人達は余裕綽々でなんと行者にんにくを摘みながら進んでおり、巻き終わって沢に戻ったときには持ちきれないほどの量をかかえておりました。さらに大ガレのトラバースをドキドキしながら越え、ようやく一安心です。その後は流木でズボンに破いてしまうアクシデントがありま

したが比較的順調に進み、本日も早い時間に百間洞沢出合までやってきてしまいました。釣りをしたい人達が圧倒的に多かったので本日の行動はここで打ち切りとなりました。昨日と同様ホテル建設、薪拾いをした後笹平さんは東京の後を追って百間洞沢へ、私は本図さん、吉田さんと共に奥赤石沢へ釣りに出かけました。奥赤石沢組は吉田さんに一匹当たりがあっただけでしたが、百間洞沢組は大当たりで尺のイワナを沢山釣り上げておりました。焚き火の周りをイワナがぐるりと囲み、この晩はまさにイワナ三昧でした。感謝、感謝です。

夕方から夜半まで激しい雨が降っていましたが、目を覚ますと雨は止んでおりました。ラッキーです。今日は赤石小屋まで辿りつかなければなりません。百間洞沢は大滝まではゴルジュが続く、大滝を過ぎると明るく開けた沢でした。大滝は直登する人達もいるようですが、私たちは左岸を巻きました。落ち口へのトラバースが恐かったです。出合から2時間ほどの遡行で百間洞山の家に着し、全遡行が終了となりました。ここから赤石岳まではガレ場を登らなければなりません。去年、ちょうど逆コースで赤石岳から百間洞山の家まで下ったときに「ここは絶対登りたくない!」と思った所です。まさか1年後に登る羽目になるとは思いませんでした。案の定バテバテになりながら2度目の赤石岳山頂を踏みます。ひと休みした後、さらに歩き続け本日の宿である赤石小屋に到着しました。到着した後なにもなくてよい山小屋はとても楽ちんです。激混みを覚悟していたのですがお客さんは意外と少なく、割合ゆったりとスペースを使うことが出来ました。

目を覚ますと雨が降っていました。お盆の山行は必ずといっていいくらい雨に降られます。登山道をきのこを探しながら延々と下ること3時間あまりでさわら島までやってきました。さわら島ではバスを待つ人達が列をなしており、私達は1時間半の待ちでした。待っている間に同日程で遡行していた〇〇山の方達に

『イワナも薪も全部とられた。』

とチクリと言われてしまいました。あとは林道をバスにゆられ畑雑ダムに戻り、温泉で汗をながした後に茨城に戻ってきました。

12日

出合(8:17)ー北沢出合(11:41)

13日

北沢出合(7:04)ー百間洞出合(12:59)

14日

百間洞出合(6:54)ー百間洞山の家(8:48)ー赤石岳山頂(13:26~13:55)ー赤石小屋(17:00)

(渡辺 記)



赤石岳頂上にての本図

薄根川川場谷

2000. 8. 16~17

パーティ L 木村一、鯉河仁志、佐野尚史

『今年の夏はどうする?。』

『なんとか山へ行けそうだよ。』

『沢登りでも行く?。』

と、いう事で今年は新人会員の佐野氏も参加できる美濃、薄根川川場谷に決定。メンバーは中年週行探偵団の木村・鯉河・佐野の3名。日程はなんとかやり繰りして1泊2日の予定。週行開始点の林間キャンプ場への入り口が分からず多少時間をロスしたが、夜半林間キャンプ場に到着し付近の広場で仮眠。翌朝。キャンプ場の事務所に登山届を提出しに行ったら、キャンプ場駐車場の片隅に駐車OKとの事。ご好意に甘えて2日間の駐車をお願いしてキャンプ場の裏手から週行開始。平凡な流れを暫く週行すると程なく“ウナギの寝床”と呼ばれる狭い廊下にでたが、“ウナギの寝床”とはうまい表現だ。ここは左岸の巻道を登ると上部は美しいナメ滝の連続、川場谷が美濃といわれる理由がなんとなく分かるような気がする場所である。ここ川場谷は上州武尊岳へ突き上げるナメ滝の連続する美濃と評判の溪との事。更に遡ると両岸が覆い被さるような狭いゴルジュの“獅子の牢”と呼ばれる所が現れてきた。狭いゴルジュの中は両岸から水滴が落ちて来て涼しげな場所である。しかし、短いゴルジュなのですぐ通過してしまうが、この上からは大岩の滝や2m~3mの滝が連続して現れ、息をつく暇もないようである。やがて川場谷の核心部8m滝が現れてきた

が、ここはザイルを出して途中ランニングビレーを2カ所とり慎重に登り難く通過。上部はナメ滝が続き、更に遡ると川原状になり、今日のネグラを探しながらの週行が続く。しばらく遡ると流れの傍にビバーク最適地を見つけてビバーク体制に入るが、佐野氏は山の中でウェルトビバークは初めてとの事。ビバークサイトが上流部の為に流木が少なく、待望の焚き火はお預けになり残念。しかたなく夕食の準備をしながら祝宴開始。沢登りで至福のひとつの時間がゆっくりと過ぎていく。空模様が少しおかしくなり、稜線は厚い雲の中。キノコの炊込み飯に岩魚の味噌汁と豪華な夕食を澄ませ酔いの回った体を横たえたと、朝からの疲労が睡魔となって体の上に覆い被さって来ていつしか夢の中。翌朝5:30分起床。稜線には朝の柔らかい陽があたり、我々を手招いているような感じがする。ビバークサイトから上部には8mの滝がありこれを高巻き、更に5m位の滝が現れるが、いかにも源流部の様相を呈してくる。そのまま忠実に沢筋を詰めるとやがて熊笹のブッシュ帯に突入。背丈を越すブッシュに悪戦苦闘しながら左を見ると小尾根が見えるので、その小尾根に向かって更に悪戦苦闘。小尾根に踏跡を期待したがガッカリ、そのまま小尾根上の藪をかき分けながら登ると人の声が聞こえるではないか!!。稜線の登山道にヒョッコリ飛び出しガッチリ握手、9:20分。最後は上州武尊岳に突き上げる予定がだいふ右に寄

ってしまったらしい。小休止後下山開始。下山路に川場尾根を選んだのが後々の後悔のはじまり。最初は順調に高度を下げるも途中から修験者道に入ってしまう岩塔の連続、鎖場あり、梯子場ありで、嫌々修行させられている感じがする。普段の行動が品行方正なのに無理矢理修行させるとは・・・トホホホ。岩場は嫌いではないのでまさか下山路で楽しめるとは思ってもいませんでした、しかし、普通の人がこの尾根に入ったら苦勞するだろうな。途中岩塔の巻道を間違えてしまい登り返すトラブル等があり嫌になった頃やっと麓に到着。だが、車を止めた林間キャンプ場まではかなりの距離がある。地図を見ると、車道を歩いて林間キャンプ場まで戻するには1時間以上かかりそうなので、林道を川場谷沿いに登り、途中からキャンプ場に行く道があるだろうとの予測で林道

を登り始めた。3人共疲れており無言で黙々と林道を歩く姿はまさに修験者そのもの。30分も登ると左に下る細い作業道が出てきたのでそれを下り、やっとの思いで林間キャンプ場に到着。4:30分帰路恒例の温泉に入り、2日間の疲れを癒し帰宅。

後日談

今回の山行後お尻が痛く、更にコリコリしたものが肛門の近くにあるので専門医のところで診察して頂くと、なんと痔核との事。おかげで翌週の山行はキャンセル。修行が足りなかったらしい。

(木村 記)



遊行する鯉河と佐野

丹波川本流

2000. 8. 20

パーティ L 本図一統、吉田 仁、三瓶勝利、渡辺聡子

今回はウォータークライミング。丹波川本流〜ノ瀬川本流をつないでいけるところまで行きましょうと本図さんのお友達の三瓶さんとも一緒に茨城を出発した。丹波川本流のメインイベントは手取淵で、へつりの途中で落ちると入口の浅瀬まで戻らなければならない。

『ここはノーザイルで行くから、落ちたらふりだしに戻ってやり直す事。絶対あわてないで流れに身を任せれば絶対浅瀬で止まるから。さ〜て誰が一番流されるかな〜』と本図さんは車中で大喜びだった。

翌朝の天気は上々で一見絶好のウォータークライミング日和のようだったが、三条新橋のわきから踏み跡をたどり沢に降りてみると、沢の水はものすごい勢いで流れ、しかも濁っており足元が全く見えない状態になっていた。ヒエ〜。こここのところの不安定な大気の影響で、頻りに雷雨が起きている影響なんだろうか。歩き出し3分で

『私中止でもいいです〜。』

と泣きを入れるが、スパルタ隊長が足を止める様子は全くない。最初の淵にやってきた。トボには”ウォーミングアップにはちょうどよい”と書いてある。うそつきだ。トップの本図さんが空身で泳ぎ、私たちはロープで引っ張ってもらう。あ〜らくちん。こんな急な流れだという

のに坊主淵にはなんと釣り人が竿を出していた。釣り師おそろべし。ここもロープに引っ張られて渡り、手取淵のところまでやってきた。

『いつもだったらここは足首くらいまでしかない浅瀬なんだけどな〜。』

ザイルなしには徒渉すら出来なそうで、ここでみんなが流されるのを楽しみにしていた本図さんはいくぶん残念のようだ。手取淵で流されたら下の滝にまきこまれること必至である。へつりはあきらめザイルをだして左岸に渡り小さく巻いた。その後至る所でハーケンを打ち、ザイルで確保してもらいながら進んだ。胴木滝もとうてい登れる状態ではなく小さく巻き、丸山入道淵は本図さんが飛び込んで右岸に渡り、淵の途中に打ってあるハーケンからシュリングをたらししてくれたので、私たちはザイルに引かれシュリングをつかみ上がった。右岸を進み、淵の最後では左岸に向かってジャンプ！私は勢いがつきすぎてヘルメットまで沈んでしまった。こここの部分はトボでは”ながれも穏やかうんぬん”と書いてあるのでかなりの増水だったことがわかる。さらにスクラム徒渉をしながら進むと監視塔の跡が見え、丹波川本流も終わりに近くなってきた。一ノ瀬橋が見えたところでラーメンを作りひと休み。この時点ですでに1時近く、当初の予



増水の本流を行く

定はどこへやら一ノ瀬川本流なんてとても行けず次回への持ち越しとなる。銚子滝はめぐるめぐるする苔におびえながら右岸を登り遡行終了となった。何と表現したらいいんだろう、ものすごいおいらん淵を下から眺めた後道路

へあがり三条新橋へともどった。

入渓(9:02)ー終了(14:06)

(渡辺 記)

一ノ瀬本流

2000. 8. 27

パーティ L 本園一統、木村一、笹平孝、渡辺聡子、三瓶勝利、吉田仁

前回の丹波川本流から一ノ瀬本流への継続遡行は、丹波川の予想外の増水で悪戦苦闘。坊主淵なんて、見てて気分が悪くなる程の増水で、一ノ瀬への継続はできず、今回は、そのやり残してきた一ノ瀬本流を、おとしにきた訳だ。上陸してくる辺りに車をデポして、ジャラジャラとギアを鳴らしながら、舗装された道を入渓地点に向けて歩き出す。通気性のないwater suitで、汗だくになるけど、それも今のうちだけ、入渓すれば、あっという間に唇は、紫色に変わっちゃうことは、分かっている。体温を上げられるだけ上げて一ノ瀬に突っ込もう！。おいらん淵を上から覗いてみると、前回よりは明らかに水量が減っている。今回は、楽勝か！いやそんなに甘くはねーだろうな。入渓すると、すぐに第一の淵だ。オレが、topで行く。かなり緩い流れなんだけど、泳げど泳げど進まない。そこをド根性でジワリジワリと進み力つきて壁に助けを求めるが、触ってがっかりホールドは、全然無くツルビカ、うしろから

『ありゃダメだな』

って言う声が聞こえてきた。それでスイッチが入った。ツルツルに磨かれた壁に爪を立てて強引にへつりナイスな水中スタンスを見つけてレスト。ここからは、飛び込みで流心を越えるが流れが強くて焦る。必死で泳ぐが、全然進まず試しに足を着いてみると胸ぐらいに深さしかなかった。命拾い！河原になっている所で後続をザックピストンする。そして息付く暇もなく第一のゴルジュに入る。またオレが、トップで行くが、まったく刃が立たず、隊長にタッチ。絶妙のへつりで、瀑流の中の大岩に立ちこみ滝をのっ越す。ナイスです。その先は、渡辺、三瓶の両氏にトップをチェンジして、らくちん遡行で終了した。

入渓(8:41)ー終了(14:48)

(吉田 記)



きわどいへつりを行く吉田



白馬岳

梅池-白馬大池-小蓮華山-白馬岳-大雪溪-猿倉

2000. 8. 28~29

パーティ L 松井裕史、松井頼（非会員）、竹中美穂（非会員）

両親は毎年百名山を一つだけ登ることにしているらしい。昨年は利尻富士、その前は朝日連峰。新潟南魚沼に育って、両親ともそれなりに山登りはしてきたという。八海山、巻機山には登り厭きたとさえ言っている。そんな両親が今年選んだのが白馬岳だった。本当は両親二人で登ることになっていた。梅雨明けの7月末の平日、わざわざ白馬山荘のシャワー付きツインベッドルームを予約していたのである（支払いは親孝行の筆者である）。しかし父親は7月7日に梅の収穫のため登っていた木から落ちて第1腰椎圧迫骨折、今シーズンは運動禁止となってしまった。しかし母は予約していたシャワー付きツインベッドルームが諦めきれなかった。今さらキャンセルもできない。何とかしてくれと筆者にせがむ。一人で出かけるとさえ言い出して周りを困らせていた。

筆者はアキレス腱を切ってから4ヶ月。きつい運動をするとまだ痛むが、試しと出かけた八海山はふつうに登ることができた。何とかなるだろうと白馬に登ることにした。ついでに婚約者も連れてゆくということで山行計画はできあがった（山登りを通じて母親と仲良くなってほしいという姑息な作戦があった）。

朝5時30分六日町発。オリンピックのおかげで野沢温泉から長野、白馬まで道路はよく整備されている。8時30分には白馬到着。コンビニで朝食と昼食を購入し意気揚々と猿倉へ向かった我々を二俣で待っていたのは通行止めの看板であった。電話で役場に照会するといつ開通するかわからないと言う。急遽予定を変更して梅池から縦走することにした。母に

『今日は白馬大池に泊まるかもしれない』

と言うと、

『意地でも白馬山荘にゆく』

という答えが返ってきた。10時過ぎゴンドラ終点から歩き始める。30分してわかったことは、母はとても歩くのが遅いということであった。荷物をどんどん減らし、そのうち足がつってしまい、テーピングを施し、荷物は全部もってなんとか歩いていった。婚約者はいがいがいしく介抱して点数を上げていた。

白馬大池3時過ぎ着。白馬館に問い合わせた結果、シャワー付きツインベッドルームのクーポンは白馬山荘の宿泊費として使えることが明らかとなった。割り当てられた部屋は3人だけの使用。小雨混じりの天候に、母もやっとな得して第一日は白馬大池山荘に宿泊。「明日無事登頂できるだろうか？」母も筆者も同じ思いで一夜を過ごした。

翌朝快晴。小屋を5時30分に出発。朝食時周りの人が母にムリダムリダと言っている。負けず嫌いの彼女はこれで発奮した。あらかじめテーピングしたのが良かったのか結構なペースで小蓮華山登頂、そのまま白馬岳山頂へ。昨日とは違ってずいぶん楽しそうに歩いている。心配された雪溪の下りも、元々雪国育ちで全く不安なし。途中で「アイゼンがないとあなたには無理でしょう」とアドバイスしてくれたおっさんを尻目に、すいすいと猿倉まで降りた。

帰りの車の中で知ったが、母は白馬山荘でラーメンなどを頼んで待っている間、シャワー付きツインベッドルームに勝手に入っているいろいろ調査していたのだという。

『思ったより広くていい部屋だった。今度はあそこがいいね。』

ご機嫌で彼女はそう語った。そしてもう一言「荷物を全部持ってもらえるなら来年は槍や穂高に行きたいね。

（松井 記）

海沢大瀑流帯

2000. 9. 3

パーティ L 渡辺聡子、本図一統、佐野尚史、松井裕史

足を壊して治ったばかりの新人（筆者）の訓練を兼ねて簡単な沢登りをして、沢の水で冷やし中華を作って食べようというのが今回の山行の趣旨であったのだと思うがよくわからない。何しろ筆者は入会まもなくアキレス腱を切って入院となり、春合宿以降全く活動していなかったため、そもそもACCJ茨城の活動をよく把握していなかった。筆者の初めての会山行である。

少し緊張して指定された集合場所にゆくと、同行する仲間が徐々に集まってきて出発となった。車の中でリーダーが渡辺さんであると伝えられた。3時間ほどで目的地の奥多摩に到着。もう11時をまわったというのに、「アメリカキャンプ村」という所は何やら俗っぽいにぎやかさに包まれていた。そこを通り越して入渓地点手前で寝た。お酒を用意し過ぎたきらいもあり、本図さんと筆者はすっかりご機嫌になって寝た。

翌朝、上々の天気で林道脇から入渓する。「大瀑流帯」の名前に反して、ただのゴロ場が続いていた。他に入渓者はいない。本図さんは

『何が大瀑流帯だ』

と怒っている。渡辺さんも

『変ですねー』

といい出す。何となく気まずい空気が流れる。しかし遡行を続けてゆくと徐々に溪相は険しさを増し、やっと沢のぼりっぽくなってきた。みんなの機嫌も良くなった。

三釜の滝は遊び場所としては最高で、みんなで滑り降りて楽しんだ。すぐ脇に鉄バシゴとコンクリートの階段があって、家族連れのギャラリーが僕らの滑りを見学していた。5歳くらいの子供と一緒に滑ろうと水に向けたが、親に窘められてのってこなかった。さらにねじれの滝は佐野さん、筆者、渡辺さんが直登を試みるも敗退、本図さんのお助け縄でクリア。大滝、不動の滝を高巻くと目的地のわさび小屋跡についた。わさび小屋というからわさびはあるのかなと周りを見渡すと、放置されたワサビ田にワサビが自生？している。みんなで大はしゃぎで採取。冷やし中華を楽しんで一般路を下山。めでたく山行終了となった。



ウォータースライダーを楽しむ松井
車(9:47)ー終了(11:52)ー車(13:50)

(松井 記)

《 山での怖い出来事 》

私がACC-Jに入会して3年目。まだ20代の血気盛んなクライマーの頃、6月の蒸し暑い土曜日の晩にパートナーのY君と一緒に谷川岳に向かいました。この年は冬に一ノ倉沢で多数のクライマーが遭難しており、まだ遺体が発見されていない遭難者も数名いました。日曜日の未明に一ノ倉沢出合に着いた我々は夜が明けるまでここで仮眠をとる事にしました。Y君は私の愛車ファミリアの中で寝るとの事、私は暑いので一ノ倉沢が見える場所でシュラフカバーに入り眠る事にし、運転の疲れもありすぐに熟睡モードに入ってしまった。暫く熟睡していたがフット人の気配で目を覚ますと、ヘルメットを被ったクライマーが1人一ノ倉沢から下ってくるのが見えました。その姿は初夏の6月には場違いなヤッケ&オーバースボン姿でまるで冬山登山の装備でした。月明かりのせいかクライマーの顔は青白く血の気がまったく無く無表情で薄気味悪かったので、体を起こそうとしたらまったく体が動きません。

『ナンダ！！。ナンダ！！。』

あせって更に手をシュラフカバーから出そうとしても手も動きません！。気が付くと先ほどのクライマーが私の体の上に乗っているではありませんか！！。大きな声で助けを呼ぼうとしたら、上に乗ったクライマーが私の口を手で抑えて全く声を出すことが出来ません。その手の冷たさと言ったらまるで雪渓の雪を押し付けられているような感じでした。クライマーの顔はこの世の者とは思えないように青白く、目だけが不気味にギラギラしていました。本当に怖くなり体中の力を振絞って

『ウワー！！。』

と大声を上げると、フット目が覚めて現世に戻ることが出来ました。気が付くと体中は汗でビッショリと濡れており、周りを見渡しても誰もおりません。怖くなり車に戻りY君に今の出来事を話すと

『それは金縛りだよ』

との事。何の事も理解できないまま車の中で更に仮眠を取り、夜明けを待って一ノ倉沢に入っていました。今日は一ノ倉沢の4ルンゼを登攀予定なのでテールリッジを登り、烏帽子スラブを横切り、本谷バンドで登攀準備を整えていると、異臭が漂ってきました。

『おい！。へんな臭いがしないか？。』

とY君に尋ねると

『何処かでロクでも出てきたんじゃないか』

との事。その後異臭も気にならず無事に4ルンゼを登攀して芝倉沢経由で一ノ倉沢出合に戻り、一ノ倉沢の水を飲もうとしたら再びあの異臭。一ノ倉沢出合に沢山いる観光客は全然気が付かない様子。後味が悪い思いで一ノ倉沢を後にして帰路に着いたが、車中Y君が

『冬の遭難者の遺体が今週中に見つかるよ！。』

との予言。昨晚の得体の知れないクライマーは成仏しない遭難者の亡霊か？？。Y君の予言通りにその3日後に遭難者の遺体が一ノ倉沢で発見されたとの事。あのときの異臭は雪に埋もれていた遭難者の体の一部が雪解けとともに露出して一ノ倉沢に漂ったものと思われる。数十年山を登っていると色々な事があるが、異常体験はこの時だけ！。

その後私は信心深くなり、年の初めには神社に参拝し、お盆にはお寺にお参りし、更に年末にはキリストの誕生日をお祝いしているので、山で幽霊・亡霊に会った事はありません。

一度会って見たいと思っていますので、どなたか心霊スポットをご存知の方紹介して下さい。

(木村 一)

上越白毛門沢

2000. 9. 10

パーティ L 木村一、笹平孝、吉田仁、渡辺聡子、佐野尚史、松井裕史

若かりし頃、一の倉沢の烏帽子奥壁や衝立岩等を登攀中に後ろを振り返ると、そこには白毛門の穏やかな姿が望まれ、緊張した心を和ませてくれたものでした。その白毛門に素晴らしい沢があると聞いて、ぜひ一度は遡行したいと思っていました。メンバーは木村・笹平・吉田・渡辺・佐野・松井の6名。事前に得た情報では集中豪雨の為に関越自動車道が通行止めとの事。一抹の不安を感じながら集合場所に向かうが、なんとかなるだろうと楽観的に考えて白毛門に向かいました。水上を過ぎた頃から道路が濡れており、直前まで雨が降っていた事を物語っていました。土合駅の広場にテントを設営して仮眠をとるが、恒例の宴会中に再び雨音が聞こえてきた。明日の遡行は半ば諦めながらシュラフカバーに潜り込みました。翌朝テントから顔を出すと雨も上がり一部には青空が見えるではないか！。渡辺さんは山に入るとアルコールは絶つジンクスがあるとの事。今回のメンバーには晴れ男（晴れ女）がいるらしい。急いでテントを撤収して身支度を整え入渓地点に向かい、東黒沢に掛かる橋の上部から入渓。滑滝の連続を遡るとハナゲの滝と呼ばれるナメ状の美しい大滝が現れるが、ここは傾斜も緩いので軽く乗越す事が出来て快適だ。暫く遡ると白毛門沢の出合に到着。ここで先行パーティを追い抜き、小滝が連続する白毛門沢の遡行は快適の一語に尽きる。更に遡ると核心部のタラタラのセンと呼ばれる15mの滝が現れるが、前日の雨で今日は水量が多く迫力充分でタラタラのセンではなくドウドウのセンと言う感じがする。ここは右岸ブッシュ帯から巻き、上部の小滝を2〜3登ると20mナメ滝が現れるが、上部に巨岩がデンと構えており圧巻である。ここを登ると実質的に核心部は終了する。この上部で小休止、ここでS氏が大キジを打つが、これが後々あのおぞましい光景の因となるのはこの時点では誰も知る由もない。上部にはジシ岩とババ岩が見えてくるが上部はスラブ帯の登攀らしい。しかし、ホールド&スタンスが豊富なので快適なスラブ登りが体験できる。スラブ帯を登り始めてすぐの所で、ボロボロのフリースジャケットを見つけ、更に登ると雨傘が落ちていました。ここまではよくある落とし物の話で済むが、更にスラブ帯を登ると今度は携帯電話、更に上部には無線機が落ちていました。更に上部にボロボロのザックが落ちていた時には、次は遭難者の死体が上部のブッシュから出てくるのではないかと薄気味悪く、先頭を登る者が躊躇した程でした。しかし期待とは裏腹に何事も無く白毛門の頂上に着いた時にはホットしましたが、頂上は中高年のオジサン&オバサンの溜まり場という感じでした。そのよ

うな場所にヘルメットを被り、ザイルを担いだ我々は場違いという感じもしましたが、そこは同じ中高年。そんなこんなで頂上は早々に後にして、下山路を下降するがこれがなかなかの急傾斜。頂上にいたオバサン達はこんな所を登ったのかと思うと感心してしまう。やっとの思いで下山し、入渓地点の東黒沢に掛かる橋の所で小休止。沢の冷た水を飲もうとして脳裏に浮かんだのが先ほどのS氏の大キジ！！上流での汚染が下流に届く頃である。しかし、すぐ脇では中高年のオバサンが『冷たくておいしい水ね』と飲んでいるではないか。知らないとは恐ろしい事であるが、事実を知らせた時の反応が恐ろしくてとても真実を告げる事が出来ませんでした。

土合駅の車に戻ると今下山した白毛門の頂上付近で雷鳴が鳴り響き、頂上は暗雲に包まれているではないか？これは大キジの祟りか？。それと晴れ男（晴れ女）の御利益か・・・。

（木村 記）



タラタラのセンを行く

小川山

2000. 9. 10

パーティ L 笹平孝、吉田仁

yosemiteに憧れるクライマーとしては、花崗岩を登らなきゃダメでしょうと言うことで小川山に行くことにした。仕事が長引いてしまい10:30に岩井を出発。今回は、二人なので高速代をケチって中津川林道を使って行くことにした。大滝村の付近は、道がよくなってしまっ、オレの持っている古い地図では対応できず戸惑いながらも、なんとか中津川林道に入る。この林道は、道幅もあるし路面も安定しているから快適にアメ4を飛ばす。パートナーの笹平君は、仕事の疲れからか激しいヘッドバンキングをくり返している。それをタッキングで、かわしつつカウンターなんか当てちゃったりしてnight runを楽しむが、路面がアスファルトに変わり静かなクルージングに変わると、さすがに睡魔が、襲ってきた。何度か気を失ったかも知れない、そんな時に迂回にも、まともに頭突きをもらってしまい鼻血を流しながら廻り目平らに到着。パーキングチケットが血に染まるが、気にしない、気にしない。

到着してすぐに寝ればいいものを、空が白々してくるまでビールをあおってしまった。おかげで翌朝は、日に

あぶられ起床、たまたま外にでてまた気を失ってしまった。ふと気づくと廻り目平は、大賑わい。ボーとサンドイッチをバクついているとトップクライマーが目の前を歩いていたりする。さすが小川山いやが上にもモチが上がってくるぜ。オレ達もギアをザックに詰め込んでガマスラブを目指した。(マラ岩じゃないのか!) 花崗岩童貞のオレ達には、妥当な所でしょう。1pうわさどおりにこれといったスタンス、ホールドは、なくベッタン、ベッタン。まあ〜こんなもんかなって感じ。2pは、ガバガバルート、3pは、one move所考え込んだけど無難にこなし40m懸垂で取付きに戻った。そこで、かるくlunchをとって兄岩に移動。タジャン、ミカビンでテンション混じりでぬけて八王子ルートを使って上のテラスに移動して紅葉をトライ。二人ともいい線まで行くが、欲しい所でR、Pならず。ここで暗くなってしまったので終了。くたくたになって車に戻った。

(吉田 記)

槍ヶ岳

2000. 9. 15~16

パーティ L 渡辺聡子、他3名

GWに穂高から見続けた(見続けさせられた)槍がカッコ良くて行きたくなって、友人を誘った。どうせ行くならと槍〜西穂の縦走をしましょうということになった。少しでも現地で眠りたかった為つくばを7時半に出発したのだが、新穂高温泉の駐車場に着いた時には午前2時をまわっており、仮眠をとった後4時半に歩き出した。林道を歩き飽きる頃白出に付きようやく登山道となりほっと一安心。白出沢の石は名前のとおり真っ白な石でできている涸れ沢で、これを見たK嬢は

『きれーい! 私が死んだら墓石はこれぐらい真っ白できれいな石がいい。』

とのたまわる。これ以降の会話の中でこの沢は墓石沢として登場することになってしまった。滝谷ではドームの頭がはっきり見え、いつか登ってみたいねと話に花が咲く。槍平からの急登には閉口したが、道に沿って特大サイズの野いちごが鈴生りで打って付けの行動食となってくれ、乗越に到着した時にはいちごでお腹がいっぱいになっていた。日差しはボカボカ、眺めは最高、テン場は目の前だというのにK嬢がザックにおおい被さるように

して寝始めてしまった。さながら亀のよう(いや失礼)。ひとしきり休み、ようやく腰を上げたのは1時間もたった頃かもしれない。テントを張って槍の頂上を目指す。ピーク時には2時間渋滞が当たり前なんだそうだが、空いている時期という事もあって難なく頂上へ行けた。この岩はセメントで固められており、ホールド、スタンスとも沢山あって安心だ。頂上からはGWに行った前穂の北尾根がはっきり見えて何だか嬉しかった。360度の展望を楽しんだ後はお食事の支度。パスタを茹でた後メッシュの袋にあけるときにS嬢が手を滑らせ、茹でたものをみごとに全部地面にぶちまけてしまった。”夕飯抜き”の文字が頭を走ったが、心優しいみんなは

『大丈夫、大丈夫。拾って洗えば全然オッケー』

と言い、一件落着。隣のテントもパスタだったらしく、まぜりゃんせ・たらこ味の私達にとって漂ってくるトマトソースの匂いはとても美味しそうだった。お腹が膨れると次にやってくるのは眠気である。睡眠不足もあってみんなテントにはいると同時にシュラフに潜り込み眠りに落ちた。

夜半過ぎにものすごい風が吹き荒れ、何度も風の音に目を覚まされた。今にもテントが飛ばされそうな勢いの風で、朝になってもこの風はまったく止む気配はなく、外にでてみると自分達のテントも含め周りのテントもみんなそろってダンスをしていた。今日は行動時間が長いのでさっさと食事をして出発しよう、と朝御飯を食べると、今度はバラバラバラと雨粒が落ちてきた。みんなで顔を見合わせる。

『どうする?』『だめかなー』『だめかもね。』『自信ないなー』

ということで縦走をあきらめ下山することにした。濃いガスのなかを南岳のほうに向かう人達もいて、ちょっと迷ったがおとなしくおる。4人で袋いっぱい野いちごをつんだり、トチの実を拾ったりしながら降りてみると、新穂高ロープウェーは強風で運行中止となっていた。村営の温泉に入り、飛騨牛の串焼きを堪能した後、つくばにもどってきた。その後野いちごはYさんがジャムに変身させてくれ、すべてみんなのお腹の中に消え失せた。

(渡辺 記)

川内山塊杉川大杉沢左俣岩塔ルンゼ

2000. 9. 14~17

パーティ L 高桑信一 (浦和浪漫山岳会)、本図一統

長年の間、川内山塊を目指す岳人のパイブルとなってきた亀田山岳会報「風雪4号」によると、大杉沢左俣上部に広がるスラブ壁を障子岩というらしい。この障子岩には奇異な岩塔があることから、ここに食い込むルンゼを岩塔ルンゼと命名したという。私が初めて岩塔ルンゼを見たのは15年前、当時はまだ記録のなかった大杉沢左俣ム沢を鯉河、川北と共に登った時である。二俣付近から見たその時の印象は、今は無い沢登り専門誌「フォールナンバー」に書いた私の記録に「岩塔ルンゼは全然登攀欲の湧かないルンゼである」と記してある。ブッシュの目立つスラブを見ていると「風雪4号」の写真で見る悪相のチムニー滝なんて本当にあるのか半信半疑でもあった。この岩塔ルンゼ登攀に燃えたぎるような情熱を注いでいたのが高桑さんであった。高桑さんから岩塔ルンゼへの誘いを受けたときも「高桑さんも物好きだなあ」と思ったことも事実であった。高桑さんは大杉沢右俣を下降中、岩塔ルンゼは下部で二俣になっており、その右俣に悪相のチムニー滝があるのが確認できたと力説していた。高桑さんの話を聞いているうちに、優柔不断の私も、だんだんその気になってきたのである。実は俺もこういうの嫌いじゃないから。

9月14日、晴れ。

一昨年(1999)の9月、満を持して川内に向かった高桑さん、坂内さん、高田さん、私を待っていたものは集中豪雨であった。もんどりうって流れる濁流の杉川を見ては、釜ノ罫の冒険ランドから一步も動けず、すごすごと帰るほかに手はなかった。今回はその雪辱戦でもある。



核心部を上から望む

我々をサポートしながら、大杉沢左俣ム沢を遡行する香内さん黒澤さんらと4人で出発。杉川はなんといっても本流遡行が面白いが、どれほどの登攀用具を用意したらよいのか見当もつかず、あれやこれやと重く

なったザックを背負っての泳ぎを避け、今回は杉川沿いのゼンマイ道を使つての入渓とする。もっとも共同装備のほとんどを香内さんと黒澤さんに持ってもらってしまったのであるが。しかし寝坊した上、黒澤さんが何かにあたらしく、体調不良でしきりにゲーゲーやっている。途中良い幕営地があったので早々ビバークすることにした。今回私の楽しみは登攀だけではなく釣りも入っているのだ。黒澤さんのおかげでゆっくり釣りを楽しむことができた。なに？釣果だって？ここまで来てボウズはないだろう、ヤボなこと聞かないでよ読者の諸君。

9月15日、晴れ。

今日中に大杉沢二俣まで入るつもりで早朝の出発となる。しかしゼンマイ道は想像以上に悪くなっており遅々として歩が進まない。自分の記憶なんていいかげんなもので、八匹沢を登った時ビバークしたのは出合対岸と記憶していたが、実際はそれより100mも上流だった。藪にいいかげん嫌気がさしたので本流を遡行することにする。やはりヤブコギより爽快だし楽である。登って行くと、これが上久沢、これが大花沢と懐かしき記憶がよみがえってきた。八匹沢は濁きと戦いながら川北、生井と共に、上久沢と大花沢はアブと戦いながら高田と登ったっけ。

アカシガラ沢出合には昼過ぎ着いたが、悪路に疲れ果てた我々には、大杉沢二俣まで行く気力は残っていなかった。というより、私にはここでビバークして釣りをしたいという気持ちが強かったので、アカシガラ沢出合ビバークは嬉しかった。手速に幕営準備を終了し釣りにかける。技術のない私でも尺上がバンバン釣れるのだ。尺下はリリースサイズである。高桑さんと黒澤さんの腕前はさすがで、毛鉤でいとも簡単に(そうに)次から次ぎへと釣り上げる。いままでここまで来て「いい思い」をしなかったことがない私にとっては天国みたいな所で、いつまでもこのままでいてほしいものだ。数年ぶりに満足できた漁だった。これで明日は心置きなく登攀に熱中できそうだ。

9月16日、晴れ。

太平洋岸や中部山岳では天気が悪いらしいが川内は連日快晴である。ルンゼ登攀には絶好のチャンスであろう。大杉沢左俣ム沢に行く香内、黒澤両氏と一緒にBCを出発する。大杉沢最初の滝は、その上の滝と共に右岸を巻くがいやらしかった。次の8mとその上の8mは右壁を、4mは左壁を直登で越すと雪渓が残っており、今年の雪の多さに改めて驚く。二俣下の20m滝は前回はシャワークライムで直登したが、水に濡れるのを嫌い右岸を高巻く。岩塔ルンゼと左俣ム沢の分岐で、香内パーティと稜線での再会を約束して分かれようとしたとき、高桑さんが香内さんに「俺たちの食料は」と言い出した。香内さん「あれ、本図さんが持ってるはずですけど」俺「え！おれ持ってこなかったよ」この後少しの問答があったが、

結局香内さんたちの食料を我パーティがぶんどってしまった。香内さんたち可哀想！

ここから眺める岩塔ルンゼは15年前と同じで、水流のないスラブが広がっているだけだった。「高桑さん、2時間もあれば抜けちゃうんじゃないですかね」「うん、あまり難しいのも困るけど、何もないのも寂しいよなあ」といった会話も出て来たほどだ。しかしこの甘い考えはすぐに覆された。100mも進むと、見るからに険悪なチョックストーンを持ったチムニー滝が連続するルンゼが右から入ってきたのである。これが岩塔ルンゼであった。それはもう完全に岩の割れ目と言ってよいもので、陰惨な感じさえ受けた。右に見える黒い垂壁が障子岩なのであろうか。取り付いたら最後、ルンゼを忠実に登る以外逃げ道はないと思われる。亀田山岳会がアタックしたのが昭和34年。夕立に遇い、まったく登ることができずに岩塔ルンゼ二俣付近から中間の岩塔リッジに逃げて、まむし尾根に達している。それから41年間、空白のままであったことが頷ける景観であった。

お互い「じゃあ、お願いします」と声を掛け合い登攀開始する。まるで地獄の入り口に向かって出発するような錯覚さえ覚えた。

小滝を2つほど越すといきなり15mCSチムニー滝が行く手を塞ぐ。「風雪4号」に出ている写真の滝だ。亀田山岳会はここから引き返したと思われる。左壁は垂壁で手が出ず、右壁の階段状にルートをとる。落ち口に出るところがホールドなくハーケンを1本使用。高桑さんは大きなカメラと交換レンズまで持参して写真を撮りまくっている。どうしてこんなに大きくて重いカメラを持ってくるんだと思うが、プロ根性とはいかにすごいものかとまったく恐れ入ってしまう。

8m滝を正面から越すと20mCSチムニー滝にでくわす。薄暗くて右手遥か上部の障子岩と思しき壁からは集中豪雨の如く滴が降り注ぎ、回りの壁はテラテラに光っている。まさに陰惨という言葉がピッタリの所だ。ここが岩塔ルンゼの核心部である。もう沢登りと言えるものではなく、完全に登攀の世界だ。ルートとして考えられるのは、シャワーを浴びての正面突破か集中豪雨を受けつつ右壁を登るかであろう。右壁は順層であるが上部はどうなっているかわからない。行きづまったら集中豪雨を浴びつつ進退窮まるのは目に見えている。ここは困難だが正面突破しかないだろう。垂壁のチムニーは真ん中にインゼルがあり、左にシンクラック、右はオフウィズに分かれている。シャワーに打たれながらオフウィズに半身を突っ込み、私の知っている限りの内面登攀の技術を駆使して体を少しずつ持ち上げる。ホールドを探すのに上を向くとシャワーが顔面を襲い息もつかない。エイリアンを2つセットするが墜落にはとても耐えられないだろう。やっと見つけたリスにアイスハーケンを打つがこれも頼りにならなかった。CSに頭がつかえる

所にボルトを1本打ち左壁から落ち口にはい上がる。私に当たった水が跳ね返り、ビレー中の高桑さんに容赦なく降りかかる。これではさすがの高桑さんもカメラを出すことができなかった。いま思えば核心部であるこの写真が一枚も無いことが非常に残念である。

滝上は井戸底から出たように明るく開放的な雰囲気になれる。続く20m2段もCS滝で、シュリングをつないでCSに引っかけ、ランニングビレーをとって左壁から乗越す。谷底はさらに明るくなるも、次から次へと現れるCS滝はすべて一筋縄では越すことが出来ず苦闘が続く。マントリング、ステミング、バックアンドニー、バックアンドフット、一つ一つパズルを解いていくようだ。6m滝で苦労していると、高桑さんから「左から行った方がいいんじゃないの」と声がかかる。「俺もその方が良いと思っていたんだよ」などと冗談も出て来て、指示通り左壁から滝頭にでると、そこはブッシュが降りてきて完登に見通しもついたので大休止とした。

その上は悪相のチムニー滝はなくなり乾いた岩の快適な登攀となった。最後はブッシュ混じりの岩登りをつるべで3ピッチ登り、まむし尾根に飛び出した。がっちり握手。振り返ると今登ってきた岩塔ルンゼの先に、たおやかな青里岳が見えた。空には雲が広がり好天も今日までのようであった。

高桑さんは、先ほどから連絡が取れない香内、黒澤パーティを迎えに登っていった。やがて戻って来て無線連絡がとれたとのこと、一安心である。しかし後になって、左俣ム沢のパーティから、まむし尾根のルートファインディングに難渋しているの、今日は時間も遅いことだしビバークすると連絡が入る。この空模様では今晚は雨になるだろうに。食料は俺たちがぶんどってしまったので持っていないはずだし、水もほとんど無いとのこと。彼らの為に水をデボし、後ろ髪を引かれる思いで下山開始。日没寸前の18時BCに帰着した。完登を祝いビールを飲むが、二人が心配で全く盛り上がらなかった。高桑さんは、なおさらのことだったと思う。明日迎えに登り返すと言っていたのが印象的であった。リーダーというものは、こうでなければいけないと思う。

9月17日、雨。

心配で熟睡できなかったのは高桑さんも同じはずだ。ところが早朝二人から無線が入り下山を開始したという。良かった！高桑さんの顔も笑顔に変わり、ホッとした様子がうかがえた。やがて左俣ム沢パーティも無事帰幕し、お互いの登攀談義に花が咲く。

3日間の好天に感謝しながら雨の中、杉川本流を泳ぎ下る。途中子供を連れた地元釣師にあったが、あのヒル地獄の中を来るのだから、地元の子供って強いんだなあ、と感心してしてしまった。そのうち雷雨となり強くなってきた。こうなったら増水と競争みたいなもので、徒渉点めがけてぶっ飛ばす。増水寸前に登山道に辿り着いた

と思ったらヒルの攻撃がまっていた。大底川を渡るころは増水が始まっていた。途中からヘッデン歩行となるが、暗くなるとヒルにやられ放題である。塩とバンストとキンカンで完全装備した私は、被害はヘソのわき一カ所であったが、他の三人は結構やられたようであった。村松はお祭りのようで花火やおみこして賑やかだ。通りがかりの食堂で盛り上がってから帰路についた。自宅着18日AM3:00。

14日。釜の罫(9:47)ービバーク地(11:14)

15日。ビバーク地(6:27)ーアカシガラ沢出合(13:14)

16日。アカシガラ沢出合(5:58)ー大杉沢二俣(8:33~8:51)ー標高尾根(13:44)ーアカシガラ沢出合(17:57)

17日。アカシガラ沢出合(12:30)ー釜の罫(20:00頃)

使用ギア エイリアン2、ボルト1、ハーケン4(すべて回収)

(本図 記)

・追伸・

香内さん、黒澤さん、重い荷物持っていただいてありがとうございました。高桑さんはこれで川内は終わったはずなのに、先日届いた浪漫の月報によると、高桑さんは「後は坂内の広倉沢右俣を付き合うのみ」と書いている。彼も相当重症の病気だわな。昔から知ってはいたけどね。やっぱり病気の程度は俺と同じだね。

一日目は黒澤さんの体調不良、二日目はゼンマイ道の荒廃で、アカシガラ沢出合まで丸二日かかったが、大杉沢二俣にビバークできる所なんて無かったし、結果的にはアカシガラ出合ビバークが一番良かったのである。アクシデントすべてが良いほうに働き、登れる時ってこんなもので、ツイテルっていうのはこういうのを言うんだよね。

三ツ峠

2000. 9. 23~24

パーティ L 本図一統、笹平 孝、吉田 仁、渡辺聡子

せっかくの連休でちょっと勿体無いけど人工登攀の練習をメインにみっちりやりましょうということになり、久しぶりにあぶみを引っぱり出して三ツ峠へと向かった。本図さんは”セストグラディスト”にご執心ようだ。勝手知ったる道を四季楽園のテラスまで歩き、ゲレンデを見下ろしてみると何と岩が濡れていてとてもフリーは出来そうにない。そのせいか岩場には誰もいないようだ。『なんとか巨人ルートを登ってセストグラディスト行こう。』

という本図さんの声におされて岩場へと下る。だが、下でギアをつけている間に現れた3人パーティが私たちより先に巨人ルートに取り付いてしまった。

『しょうがない。じゃあ待っている間にここで練習しよう。』

と5月に来た時と同じハングのところで練習を開始した。暫くすると、雨が降り出してきてしまった。今日は天気は持つて予報では言っていたのにうそつきだ。巨人ルートに行ったパーティはこの雨でかなりの苦戦を強いられているようだ。私たちはハングの下にいたので雨粒が直接かかることはなかったが、ハングの上から水が流れ落ちてきて、水を浴びながらの登攀になってしまう。水浴びしながらのクライミングは沢の時だけで充分なのに。ここにある2本のルートを交互に何回かリードしてこのハングは満腹になったころ、いよいよ雨が激しくなってきた。

『もっとかぶったところに行って避難しよう。』

と、ある意味おそろしい言葉に従い右の方へ移動した。確かにここなら濡れずにすむ。でもループになっているところにボルトとハーケンが・・。

『じゃあここでやるか。』

と本図さんがループになっている時のあぶみの乗り方を私たちに教えながらヒョイヒョイと越えていく。ハングの出口からはやはり雨水が流れ落ちている。

『外にでると濡れるな。いやだな。』

といいつつも

『ここが一番むずかしいからな。』

と越え方を教えてもらう。

『リードするか?』

の問いに

『トップロープがいいです。』

と3人で声をそろえセットしてもらう。笹平さん、吉田さんはさくっと越えてしまう(2人も余裕でリードできたんじゃない)。私の番になってとんでもないことに気付く。もしかして私は最後にロープをかけかえて懸垂

で降りてこなきゃならないの??尋ねてみると大当たり。あちゃー、登れるどうかかわからないのに。よいしょ、よいしょと必死になって手を伸ばし足を出しあぶみにしがみつく。出口での立ち込みはやはりなかなか出来ず、かなり手こずる。もう濡れるのなんてお構いなしだった。何とか終了点まで行くことができセルフをとって一安心。のはずだがピンが信用できないのでかなりドキドキものだった。本図さんの指示通りにロープをかけかえて8環をセットし懸垂して無事に地上に戻ってこれた。これでよい時間になったので荷物をまとめて下山する事にした。三ツ峠は幕営禁止なので泊付きのときは小屋に泊まるのが普通なのだろうが、うちは儉約精神旺盛なクラブなので一旦下山し明日また同じ道を登るのだ。駐車場に着いた後、笹平さんと吉田さんは夕飯の準備、私と本図さんは買い出しに出かけた。お店で物色していたら先にレジへ行っていた本図さんから

『わたなべさん、俺やられたよ!』

という声が聞こえてきた。

『またダニですかあ?』

ととぼけた返事をして言ってみると本図さんの財布からお札がきれいになくなっていた。駐車場にもどり、2人に貴重品の確認をしてもらったところ、被害にあったのは本図さんだけであった。車の鍵はちゃんとかかっていたし、車中をあらされた気配もなかったのに、車上ドロの手口はお見事である。夕飯を食べ終わり、横になる時間になっても雨はシトシトと降り続き、明日はダメかなと思いながら眠りについた。

朝目を覚ましてみると思いもかけず青空が見えていた。前日にあれだけ降ってしまったので登れるかどうかかわからないけど、取り敢えず岩場までいってみることにした。だが、案の定岩場はやはり濡れていて、特に左側は岩の上を水が流れているような状態だった。それでも右側の岩場は半がわきになっていてガイドパーティらしき人達を含め数パーティが岩に取り付いていた。それでは私達もという事で笹平さんー吉田さん、本図さんー私に別れて登り始めた。笹平さんたちは達は人工の練習を始めたが、私達はフリーでまずは一般ルート右から登り始めた。最初はここで降りようと思っていたのだが、どうせなら上まで行ってしまおうということで次は十字クラック。1歩をあげる踏ん切りがなかなかつかなかったがなんとかはいあがる。ジャミングの練習もしなくてはと思ったビッチだった。3ビッチ目はやさしい所を登り天狗の踊り場まについた。大根おろしを登ろうかどうか迷ったが、今回は止めにした。懸垂の途中で笹平さん達に

会い、彼らは大根おろしを登ると言っていた。次はビンの感覚がちょっと遠いルートで人工を練習する事にした。登っている時に吉田さんたちが降りてきて、隣にある同じ様なルートで練習を始めた。私は人工を2本練習した後、一般ルートの中央、左、都岳連ルートを登らせてもらった。ちょうど切りも良かったし、時間的にもよい頃

だったのでこれで練習を止めにして、茨城に戻ってきた。

天気がいまいちだったせいか、今回も三ツ峠は空いて十分に練習ができた。はたして次回は”セストグラディスト”行けるやいなや!?

(渡辺 記)

思えば去年の夏からこっち、私はいろんなものに当たっている。嬉しい物は福引きや年賀状のお年玉クジから、有り難くない物は落石や組合の役員までたくさん当たっている。しかし、まさかキノコに当たるとは予想もしなかった。

10月だったか、現地まで行ってみるとあいにくの雨。山行が中止となりKさん、Mさんと私の3人でキノコをとって帰ろうということになった。目を皿のようにして探し続けて数時間、各々の袋が一杯になったころ車にもどり収穫物の配給を受けた。キノコ取り超初心者わたしにMさんは「これは〇〇タケ、これが〇〇タケ」と説明してくれた。そして最後に『これはナラタケモドキで間違いのないと思うけど、念のため家で調べるからそれまで食べないこと。俺はこれは嫌いだからKさんと山分けしろや。』と言ってブツを1本だけ手にとり自分のザックにしまったのだった。家に帰った後調べてみると、配給されたものは確かにナラタケモドキによく似ているのだがどうも色が写真よりもかなり白っぽい。数冊本を見てもどうもおかしい。そんなことをしているとMさんから「間違いなくナラタケモドキだから食べていいよ」という電話があった。Mさんを信じていないわけでは決していないが、自分で納得できていないまま食べることは出来ず、かといって捨てることも出来ずにキノコは冷凍庫の中で眠ることになった。次の集会の時、Kさんにキノコを食べたかどうか訪ねてみると

『すぐに全部食べちゃったよ。なかなかおいしかったよ、まだ食べてないの?』。Kさんはいつも通り元気そうだった。安心した私は翌日のお昼の鍋焼きのなかに2、3本投入して食した。味はまあまあ、後味に若干の苦みが残る。午後の仕事を開始してまもなく体中から汗が出てくるのを感じ、そのうち視力の調節がきかなくなっている自分に気がついた。思い当たるのはキノコしかないが、その時のわたしには病院に行っている時間はなく、腹痛、下痢、嘔吐のどれかがでたら観念しようと心に決めて仕事を続けた。幸い数時間後には症状も回復してきたので大事にならずにすんだ。普段おおざっぱな私が用心に用心を重ねた結果がこれか、とちょっと情けなくもあった一件であった。私がデリケートなのかKさんが人並みはずれて丈夫なのか、1本しかもって帰らなかったMさんにまさに一本とられたのか、今となっては笑い話であるが、その時はキノコは売ってるもので十分と心に誓ったのであった。

その後も”当たる”ことは続いているが、車や人に当たることのないように気をつけなくては。

(わたなべ)

那須・苦土川井戸沢右俣

2000. 10. 1

パーティ 本図一統単独

江戸時代に、会津藩が開削した会津中街道の宿場として栄えた三斗小屋宿という宿場があったが、今は屋敷跡や石仏が当時の面影を残しているだけである。井戸沢は、この歴史ある三斗小屋宿跡を流れる苦土川の支流で、沢登りの面白さが十分に堪能できる沢である。苦土は（くど）と読み、酸化マグネシウムでも昔に採れたのかと思い、黒磯市役所に問い合わせると、ここでは（にがど）と読み、酸化マグネシウムが採れたという話は聞いたことがない、という返事をいただいた。この沢は以前にも登ったことがあるが、今回の遡行は、今度山と溪谷社から発売される沢登りの本の取材山行なのである。

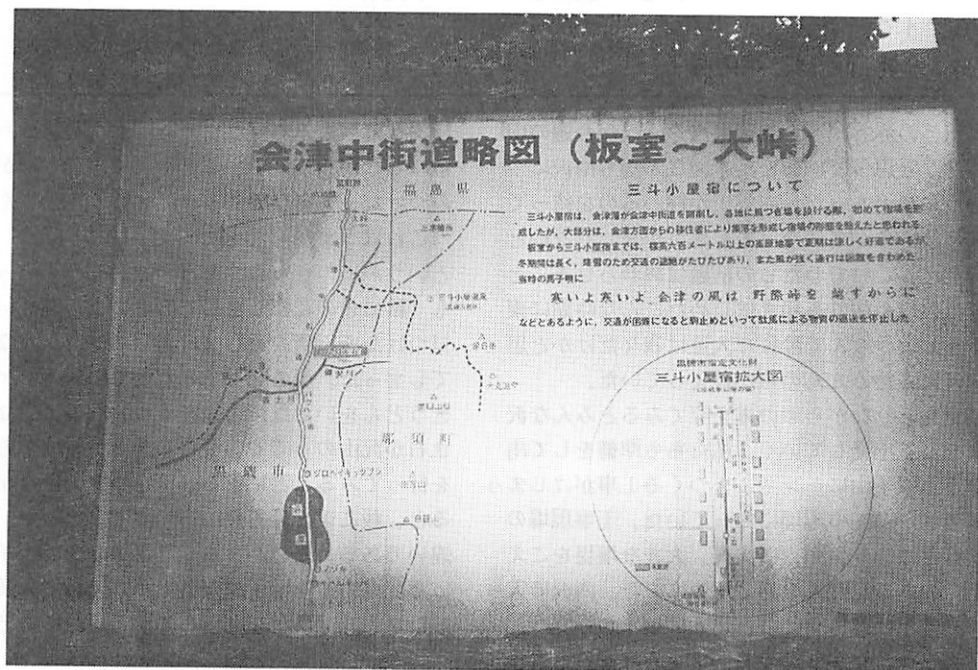
相変わらず登山口までの林道はメチャクチャ悪い道だ。夜中までシトシトと雨が降っていたが、仮眠後起き出す頃には上がっていた。今にも再び泣き出しそうな空模様で出発するのがイヤになってしまう。もっとも今回は家を出るときからこの天気は予想できていた。でも締め切りがせっぱ詰まっているし、雨のときにでも取材山行を消化しておかなければ、自分の山行にしわ寄せがくるので、丁度いいと言えばそうなのかも知れない。早く登って早く降りて早く帰ってジムにでも行こうかな、というわけで出発。

苦土川に架かる橋を右に見ながら本流の右岸を数十m行くと、右岸から伏流の沢が入ってくる。これが目指す井戸沢である。出合は、とても沢登りの対象になる沢と

は思えない平凡な沢相だ。井戸沢に入ると間もなく水流が現れ15m末広りの滝に出た。今日はすべての滝を写真に収めなければならない。右のブッシュ付きリッジを登るが、ハングした所には残置ハーケンがあった。滝上で流れが90度右に曲がると、次から次へと滑滝が続くが、すべて直登で越す。右岸にフィックスザイルのある5m滝は左から巻いて15m階段状の滝は左を快適に登る。ザイルの必要性は感じない容易なクライムであり、高度感があるので楽しい。二俣までは快適なナメが続く。二俣は背後の景色がよいはずだが今日はイマイチだ。それに単独なので休む気にもならない。右俣に入り10m窪状滝を正面から突破。その時の気象条件にもよるが、普通この辺りで水流がなくなると思うが今日は流れている。やがてどこから来たのかと思う位の太岩が沢を塞いでいる所を過ぎると、ヤブこぎなしで稜線までは一投足で着いた。単独はやはり速い。

流石山、大峠を経由して三斗小屋温泉に向かう道を行く。峠を渡ったところで苦土川登山口に向かう近道に入る。この道は指導標もなく、地図にも出ていないが、とても歩きやすくお薦めの道である。途中、今日から禁漁なので来年の為に魚影を探しながら歩く。その結果は教えません、僕だけの内緒です。キノコを採りながら下って行くと、あっという間に車に着いてしまった。

例の悪路を降りて行くと、驚いたことに乗用車で入っ



三斗小屋宿にあった看板

てきた輩と行き会った。運転者は戻るに戻れず泣きそうな顔をしている。なんと外車ではないか。バックじゃねえのと思ったが、俺の車じゃないからかわない。どうぞボコボコになって帰ってください。さすがデリカは悪路には強い。悪い乗り心地を我慢して乗ってやっているのだから、これくらいは当然であろう。

車発(7:02)―遡行―稜線―下降―車着(11:34)

(本図 記)

注＝三斗小屋宿への道は、今年の3月1日から車で走行はできなくなった。現在車が入れるのは白湯山林道終点までである。

小川山・フリークライミング

2000. 10. 8～9

パーティ L 吉田仁、笹平孝、渡辺聡子

前回来た時よりも、かなり車が多く駐車場は満車になっていた。斜めになっている所にテントを張って寝た。

フリークライミングの朝はのんびりと起きる。まず、屋根岩のセレクションに行ったが順番待ちのパーティで賑っていた。すぐ隣の岩場には誰も居ないので、このルートに取り付く。DDTにトップロープをセットして、しばらく遊ぶ。11aの難しいルートで、下部の1ポイントはA0で越えて、後は滑りそうなスラブをなんとか越えていくルートだった。何度かやってから、この上にあるルートに行った。ルートの左側にデカイ岩が突き出ている、落ちると直撃しそうで怖かった。

次に、前に行った兄岩の紅葉に行った。10aのショートルートで、3人とも無事レットポイントで登れた。そのうち雨が降り出したため、他の人達は居なくなり、うちのメンバーは雨で岩が濡れても、次は何処に行くか話

し合っていた。少し回り込んだ所にある、ガンバレ熊さんに取り付く。岩が濡れているせいもあって、トップロープをセットすることが出来なかった。仕方なく諦めて、おばさん岩に移動した。子供をなめんなよは、ハング下のルートなので下半分は乾いていた。ここでザックの中から秘密兵器のアブミを取り出し、トップロープをセットする。一通り登った所で薄暗くなってきたので、駐車場へ戻った。車もだいぶ減り、いいテン場が空いていたのでそこにテントを移動する。焚き火をしながらビールで乾杯をした。今日採れた、クリタケの味噌汁を作って食べたが、吉田さんは警戒して食べなかった。

次の日は雨が降っていたので、諦めて撤収する。その後、つくばのクライミングジムで本図さんと合流し、遊んでいった。

(渡辺 記)

阿武隈川・南沢

2000. 10. 22

パーティ L 本図一統、渡辺聡子

本図さん担当の赤谷川か、渡辺担当の南沢か今週の山行はどっち？？と思っていると、本図さんから南沢につきあうという連絡があった。赤谷川が終わるのを待っていたら南沢に行くのが冬になってしまうかもしれないと心配していたが、これでわたしの宿題は終わらせることができそうだ。雪の便りも届きはじめたこんな時期に東北で沢登りをしようなんて粋狂な人達は我々だけかと思いきや、以外にもたくさんの車が停まっていた。

翌朝、朝食をとりながら車の外を見てみるとみんな沢登りの支度をして出発していく。私たちが準備をして南沢へとむかう。甲子山にトンネルをつくる工事ははじまっています、林道は一部工事現場になっていた。工事現場の脇から林道へとはいり、すぐに入渓。大きな堰堤をこえると南沢出合のある見覚えのある河原にでた。南沢に入っていくと、去年とは違いやたらと足元に倒木が目立つ。今回は遡行図を書きながらなので、きょろきょろとまわりをみまわしているとナラタケがやけに目についた。ナ

ラタケに目もくれず、覚えたばかりのブナハリタケを蹴散らしながら進んでいくとやがて本図さんがムキタケをみつけた。大喜びでザックにしまう本図さん。

『これはうまいんだ！』

という声にのせられ、遡行図を書くのもそっちのけで私も一緒にきのこ探しをしてしまい、そのせいでのこを見つけた所以降の遡行図は非常にシンプルなものになってしまった。奥の二俣でとれたてのムキタケ入りの鍋焼きうどんをいただき舌鼓をうつ。右俣は急なルンゼに浮き石が沢山のってていやしかった記憶があるので左俣を行ってみることにする。笹をかき分けながら進んでみると、藪こぎ3分で登山道にでてしまった。右俣とは大違いである。そこから歩くこと10分で甲子山の頂上だった。登山道を甲子温泉まで下り、再度入渓して蹴散らしたブナハリタケを回収してから茨城にもどってきた。

(渡辺 記)

明星山南壁・左岩稜

2000. 11. 3~4

パーティ L 本図一統、笹平孝、吉田仁、渡辺聡子、木村一

昨夜から降り出した雨の影響で、白く泡立つ奔流によって明星山南壁への挑戦者を拒むかのように激流と化した小滝川の前で、我々は為すすべも無く時の経過を待つ事しか出来なかった。雨に濡れて黒々とした南壁が徐々に石灰岩の美白を取り戻しつつある。明日の登攀の為に小滝川の渡渉点を確認して、その夜はACC-J茨城(5名)・ACC-J東京(4名)・電総研山の会(4名)の総勢13名による大宴会。今回は女性クライマーが3人参加しているので華やかさと賑やかな山行になってしまったが、今ではこのような山行が大好きになってしまった。

翌朝、4時半起床。満天の星空の下で手早く朝食を取り、夜が明けきらぬ前にテントサイトを出発。小滝川の渡渉点は昨日確認済みなのでズボンを太腿まで捲り上げて迷わず入渓。2人&3人に分かれてスクラム渡渉で難なく突破。一流の沢屋で卓越したクライマー本図隊長の慧眼は流石である。南壁左岩稜の取付き下で登攀準備をし、本図・渡辺パーティが先行して、後続が笹平・吉田・木村の2パーティに分かれて登攀開始。小滝川対岸を見ると後続のパーティが渡渉点を求めて右往左往している様子だ。沢登りの豊富な経験があってこそその確かな渡渉点が発見できるのであり、岩登りだけのクライマーにはチョット難しいかもしれない。後続のパーティは胸まで水に漬かったり、ザイルを使用したりで小滝川の渡渉に

かなり難儀している様子だ。左岩稜1ピッチ目はフリー登攀だが、かなり昔に登った時と比べて難しくなっている。自分の技量が落ちた為か？それとも岩が崩壊して難しくなっているのか？。1ピッチ登りテラスに立つが、南壁には未だ陽があたらず濡れた下半身は寒くてガタガタ震いがきてしまう(恐怖心の震いか？)。2ピッチ目はフリーから人工登攀。久しぶりのアブミ登攀だが、20年以上はアブミに乗った事が無いと思うが・・・。

3ピッチ目はカブリ気味の壁をアブミで越していくがビンの間隔が短く快適な人工登攀だ。更に上部の凹状部を人工登攀とフリーで登り失神テラスに這い上がる。ここは高度感が素晴らしく、尻の下は数百メートルの空間が広がりゾクゾクするような感じが堪らない。この感覚はクライマーにしか分からない感覚だと思う。この頃から南壁に陽が当たりはじめたので暖かくなってきた。気持ちにも多少余裕が出てきたので周りを眺めると、紅黄に彩られた山々が美しく、今日は最高の登攀日和である。先行している本図パーティも順調そうだし、我々パーティのトップを登る笹平君も順調にザイルを伸ばしている。後続の吉田・木村は同時行動で登るが、本図パーティとの間隔が広がってしまった。失神テラス上部の1ピッチをフリーで登ると松ノ木テラスに出て、バンドを左に回りこむ所でザイルの流れが悪くなり、トップとの間に声も届かず笛での意思確認になってしまい、多少時間を要



左岩稜の核心部を登る渡辺

してしまった。更に上部は傾斜が落ちてくるが浮石が多くなり嫌らしくなってきた。上部には下から見ても顕著な凹状部が現れてきたが、これを右側から乗り越すと登攀終了。本図・渡辺パーティが待っていてくれた。ここで登攀用具を外し小休止後、西面のブッシュ帯を下降開始。昨日の雨の影響で下降路がぬかるんでいてかなり悪く感じられる。ここでスリップすると数百メートルのダイビングになってしまうので慎重に下るが、足元が不安定なので心もとない。途中、何度もぬかるみに足を滑らしながらやっとの思いで小滝川の側道に下山。橋を渡り対岸をテントサイトに向かって歩いていると後ろから軽トラックが走ってきたので手を上げると乗せてくれるとのこと。ラッキー!!。テントサイトに着くと水島さんが1人で待っているではないか?。他のメンバーは一般ルートから明星山の頂上

に向かったとのことなので、我々は街に出て今宵の宴会の材料買出し。夜は昨夜のメンバー全員で再び星空の下大宴会。明星山南壁を見るとビバークパーティの灯かりがチカチカしているではないか!!。今日は南壁には沢山のパーティが取付いたので、遅く取付いたパーティはビバークになったらしいが今夜は一段と冷え込んでいる。ビバークパーティから我々を見ると羨ましいだろうなと思いながら大宴会の夜は更けて行く。ビールが美味しい。ワインが美味しい。日本酒が美味しい。明日も快晴なので何処に登ろうかな・・・・・・・・・・。

BC (5:36) - 取付 (6:16) - 終了点 (10:09~11:14) -
BC (13:17)

(木村 記)

明星山 P 6 東稜

2000. 11. 3~4

パーティ L 本図一統、笹平孝、吉田仁、渡辺聡子、木村一 (ACC-J 茨城)
名雪博二、松原文男、金沢清 (ACC-J 東京)

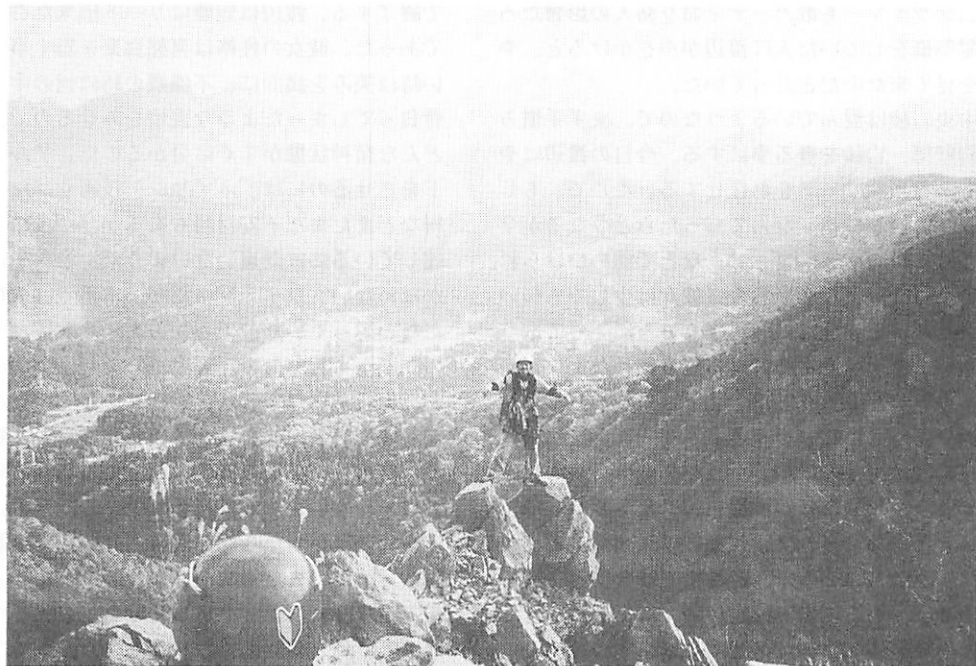
昨日に続き4時半起床、今日は一段と冷え込みが厳しくなっている。昨日同様6時前にテントサイトを出発して小滝川の渡渉点に向かった。小滝川は昨日1日で水量が減少したので難なく通過。我々が南壁の下にきたのを見て対岸にいた2人パーティが慌てた様子で強引に渡渉を開始。1人は胸まで水に漬かりながら、もう1人は水に流されかかったので渡渉を中止して下流から再トライ。我々が南壁に取り付くと勘違いして急いで順番取りに来たと推測する。昨日ACC-J東京のメンバーはP6東稜に登るべく小滝川の渡渉を試みたが失敗したらしい。先頭のN氏は渡渉に成功したが後続のM氏&K氏は引き返したとの事。昨日の小滝川の水量では止むを得ないが・・・・。リーダーのN氏は昨晩はアルコールの勢いでM氏&K氏に絶交を宣言していたが、そこはお互いに命を助け合った仲。今日はスッカリ忘れていた様子。東京のメンバーは毎回この調子らしい。今日の我々の目標はP6東稜なので東壁ルンゼを詰める事にした。東壁ルンゼを詰めてドームに続くガレ場を登り、途中から左のブッシュ帯に入り南稜のコルに立つ。ここから眺めるP6フランケ～東稜はまさに岩の殿堂といった感じがする。フランケを眺める静かな場所の岩肌に某登山家のレリーフが埋め込まれているが、素晴らしい所である。下を見ると水島さんが手を振ってエールを送っているのが確認できる。南稜のコルから右ルンゼに降りるが、右ルンゼは最近岩ナダレがあったらしく岩がガラガラしている。東稜の基部で登攀用具を身につけて、名雪・松原・金

沢 (ACC-J 東京) パーティが先行して。更に本図・渡辺パーティが後続して、ラストが吉田・笹平・木村パーティの順に登攀開始。Ⅲ級程度の易しいフェースを登るが、ルート全体に浮石が多い為に先行パーティから時折落石があるので、上部に見える凹角状岩壁の下に入りたいので急いで登る。凹角状岩壁は落石に対しては安全なのでここでピッチを区切り、更にここから上部は東稜に沿って登るので吉田君が快調にザイルを伸ばす。上部の岩陰でピッチを区切るが、右手のフェースには上部から落石がひっきりなしに落ちて行く。一段と高い声で『ラク』とコールがあり、頭大の石が轟音と共に落ちて行くではないか!!。先行パーティが岩の脆い部分を登攀中らしいので落石が落ちてくまで少し様子を見る事にした。落石が一段落したので岩陰から出て登攀続行。程なく2ピッチの易しいフリーの登攀で終了点。そこには名雪パーティ&本図パーティが待っていてくれた。山仲間とは素晴らしい。小休止後、P6に立ち、南壁の頭に向かって下降開始。急なブッシュ帯をブッシュにぶら下がりながら急斜面の下降。どこでも下降出来そうなので、下降路のルートファインディングが難しい。明星山のエキスパート本図隊長の的確な判断で何とか南壁の頭まで下降。更に左岩稜の終了点まで下降したいのだがルートが判然としない。途中の太い木で懸垂下降を1回。この後アクシデント発生。回収したザイルを背負って下降していた金沢氏が枯枝を掴んだ時、枯枝が折れて頭から1回転。廻りで見っていた誰もが『ァー』と絶句した

瞬間。悪運強い金沢氏は下の木でストップ。もしここで止まらなかったら数百メートルのダイビングは必至。相変わらず悪運が強い。左岩稜終了点の太い松ノ木が確認できたので昨日と同じ下降路を下山。今日は下降路がぬかるんでいないので気分的には楽勝気分。テントサイトに着くと水島さんがテント撤収の準備をしてくれていた。ので急いでテント撤収。振り返ると秋の陽に白く輝く南

壁が聳え立ち、その奥には今日我々が登ったP6東稜がその一部を覗かせている。明星山はこの時期に大勢の仲間と一緒に登るのが楽しい。また来年も訪れたいと思いながら小滝川を後にした。

(木村 記)



終了点で気分はガストンレビューファ？の吉田

乾徳山旗立岩クライミング

2000. 11. 19

パーティ L 本図一統、渡辺聡子、松原丈夫、名雪博二、金沢清

この山行計画の発端は、乾徳山が岳人11月号で紹介されているのを渡辺が見たのが切っ掛けと言ってよい。乾徳山は私が山登りを始めた頃から人気の山であり、この岩場の存在についても30年以上も前から知っていたが、今まで行くチャンスがなかったので楽しみではある。またこの時期は、山行するには中途半端の頃で、雪山やスキーには早いし、沢登りや岩登りには遅く、キノコ採りか岩トレといった活動になってしまう。でも私にとっては大好きな西上州のヤブ山の時期でもあるのだ。しかし最近では同好者がいなくてトンとご無沙汰している。どうしてもリードの練習をしたいという渡辺の希望を取り入れてゲレンデに行く事にした。いつも同じゲレンデでは飽きるの、変った所に行こうという事になり、乾徳山に決まった次第である。クラブのメーリングリストで参加希望者を募ったところ、東京から3人合流したい旨のメールが入った。

雁坂トンネルをぬけ、三富村役場近くから大平牧場へ

の道を辿る。牧場には既に東京の3人組が到着しており宴会をやっていた。牧場の駐車場は有料なので、上部の無料駐車スペースを探しに行く。何台か停められそうな所があったので、東京パーティを迎えに行き、そこに移動して軽く宴会した後就寝となる。

翌朝、出発準備をしていると、東京パーティは朝食にコンビニの鍋焼きうどんを作っていた。私も渡辺もパンで軽く済ませていた。彼女が

『あの鍋焼きおいしいそうですね』

と耳打ちしてきた。私もまったく同感だった。私も渡辺も子供と同じで、人の食べるものは何でも美味しく見えてしまう。これ以来二人とも現在(2001年2月)まで弁当は鍋焼きが続いている。それも朝昼共にである。もしかすると彼女は、家にいるときも朝昼晩とコンビニなべやきを食べているのかもしれない。これがいつまで続くかだが、渡辺曰く

『まだまだ飽きていません、これは当分続きそうです』

だって。

乾徳山は昔から人気の山であることは前述したが、それは現在も変わっていないようだ。徳和からの道を合わせると途端に人が多くなる。どこの山に行っても中高年が多い中で、どういうわけかここは若者が多く目につく。目指す岩場は頂上から西に一気に落ちている。ちょっと脆いのは否めないが、花崗岩で想像していたより快適そうである。クライマーも数パーティおり岳人の影響だろうか？登攀準備をしていた人に渡辺が声をかけると、やはり岳人を見て来たのだと言っていた。

旗立岩中央岩稜は混んでいるようなので、まず手慣らしに頂上岩壁第一岩稜に登る事にする。今日の渡辺はやる気十分であり当然リードをお任せする。ここで、もし私が「トップは俺がやる」なんて言ったらどうなるか？おそらく私は、紐、ムチ、ローソクなどで痛めつけられ、五体満足で家には帰れないだろう。彼女は少しでも長いルートを登りたいと、通常の取付よりさらに下って取り付く。東京パーティは通常取付から登り始めたようだ。クラック、カンテ、リッジと頂上まで2ピッチだったが渡辺は難無くリードした。

次は中央岩稜に行くのだが、ハイキングコースの杖藜岩は鎖場で、ハイカーたちが渋滞を起こしており、降りるのにちょっと待たせられた。杖藜岩は（つえすていわ）と読むのだろうか？おそらく、ここまで杖を使って登って来た登山者は、この岩場で杖がジャマになり捨てたくなるから付いた名称だと私は推測する。

中央岩稜下部は壁になっていて取付が判然とせず、いろいろな所から取り付いているようだ。ここでカラビナ

1枚をゲット。下から上を見て左側の快適そうな岩稜に取付く。当然リードは渡辺である。4級位のピッチであるが、高度感があり落ちると無事では帰れない。私達の心配をよそに

『では行きま〜す』

と嬉しそうに登っていった。う〜んなかなかやるわい、と感じたのが正直な私の感想である。ど快適な3ピッチで終了する。渡辺は無難にリード出来たことに満足そうであった。彼女の性格は喜怒哀楽を隠す事は無く、嬉しい時は笑みを満面に、不機嫌の時は世の中の不幸を全部背負ってしまったような表情をみせるので、顔を見ればどんな精神状態かすぐに分かるのだ。アルパインのリードをさせるのには、ネイリング技術やゴマカシ技術の会得などまだまだ不安材料もあるが、一步いっば確実に上達しているには間違いないようだ。ジムでは彼女に絶対かなわないクライミングだが、本番ではまだ俺の方が上だと思っていた。でもこの調子じゃ抜かれるのは時間の問題かもしれない。東京パーティは金沢がリードしたが、何年も岩登りらしい岩登りをしていなかったのに、安定したバランスを見せていた。それも運動靴なのである。昔とった杵柄とはこのことだろう。この岩場は初心者トレーニングには最適どころである。

冷たい風が当たらない場所で遅い昼食を取る。東京の誰だったか、また鍋焼きを作っていた。渡辺もご相伴にあずかったようでさぞかし満足した事だろう。ハイカー達は既に降りてしまい、我々だけの静かになった山をゆっくり下山する。乾徳山は良い山であった。

林道に降り立つとユニックが止まっており、牧場のお



中央岩稜を登る

やじがなにやらやっていた。みると路肩の駐車スペースに車を停められないよう大きな石を置いているのだった。え～！なぜ～！信じられね～！きたねえんじゃね～の、おやじよ～！路肩に車を停められると牧場の有料駐車場に停める車が減ることは分かるが、牧場のおやじにこんな意地悪をする権限があるのだろうか。いったいこの林

道はどここの管轄なんだろう。牧場はおやじの私有地だろうが、林道はおそらく営林署か町の管理下にあるはずだ。あとで調べてみよう。醜いものを見てしまったので、せっかくの乾徳山も色あせてしまった。

(本図 記)

天神平スキー場でのビーコン訓練

2000. 12. 2

パーティ L 本図一統、渡辺聡子、松井裕史、佐野尚史

12月最初の日曜日、前夜泊で谷川岳天神平にて、冬山に備えてのビーコン訓練が行われました。小生にとって、ビーコンという名前を聞くのが初めてです（存在も知りませんでした）、その操作方法にいたっては全くわかりません。シーズンが始まったばかりとあって、積雪はまだ膝下程度。ほとんどがスキー客の中、異色の登山者（否、同じ場所を歩き回る変な人々？）。彼らにとっては、或いは、邪魔な存在だったかも知れません。始めのうちは、どういう具合で機械が反応するのか？、どれくらいの距離で反応するのか？、どの方向に向けるのか？、など全くわかりませんでしたが、回数をこなすうちに要領もつかめ、ちょっとした「かくれんぼ」気分で探すことが出来るようになりました。しかし、実際に使用する場面には出くわしたくないものです。今回は、雪の量が少なく、ビーコン本体のみを隠してそれを見つ

け出すことしか出来ず、ゾンデ棒の使用にはいたりませんでした。シーズン只中の雪量の多い時に再度訓練をするのも一考かとも思いましたが、如何でしょうか？

(佐野 記)

富士山

2000. 12. 16～17

パーティ L 本図一統、渡辺聡子

これからのシーズンへ向けてのアイゼントレとして富士山往復をする許可をもらった。スバルライン5合目の駐車場で木村さん、佐野さん、遠藤さんと別れて早々に歩き出した。つづら折りになっている登山道は長く、歩いても歩いても上の方に見える目標物になかなかたどりつかない。雪は7合目を過ぎたところから道に見えはじめ、8合目でようやく完全に覆われるといった状態だった。風は朝には無風だったのだが、だんだん強くなり、8合目近くまで来たときには時折吹き付ける突風に何度も体を持っていかれそうになった。本八合のすぐ上の小屋の所にいいテントサイトがあったのでビバーク準備にはいる。非常に強い風のためテントを張るのに1時間以上かかり、中に入った後も風が吹くたびに荷物があちこちに動くといった状態だった。なんでも河口湖周辺には強風警報がでていたそう。夜中に何度も風にたたき起こされたが、朝にはさほどでもなくなっていたので予定通り頂上へと向かった。延々と登り続けようやく頂上にたど

りつき、狛犬を抱きしめる。お鉢めぐりをしようかと思ったが、余裕を持って下りたかったのでやめにして早々に下りはじめた。一部青氷があって少し緊張したが、雪の状態も良かったので危なげなく下りることができた。登りも長かったが下りもまた長い！「登らぬバカ、2度登るバカ」というがまさにその通りだ。これで私はようやく「登らぬバカ」ではなくなったのだが、剣が峰にはいなくなっちゃ！。そうすると今度は「2度のぼるバカ」になってしまう。うーん、どおしよう・・・。

12月16日 富士山

5合目(9:37)－8合目(13時頃)

12月17日 富士山

8合目(6:59)－頂上(9:39)

(渡辺 記)



富士山山頂にて・渡辺、本國

日光白根山トレーニング山行

2000. 12. 22

パーティ 佐野尚史

正月山行を控え、そのトレーニングを兼ねて、一日の有給休暇を取り12月22日（金）と23日（土）の二泊二日で日光白根山に行きました。両日とも天気は快晴、人のいない（人と余り会わない）静かなトレーニング山行となりました。

22日（金）は早朝3時半に龍ヶ崎市の自宅を出発。途中休憩を取りながら、6時半過ぎには湯ノ湖のほとりの湯元の駐車場に到着。40分ほどで準備を整え、7時過ぎに行動を開始。歩き出すとすぐに駐在所があり、そこに登山届を出していると、中から駐在所のお巡りさんが出てきて、秋に奥白根山に続く登山道の点検と標識の架け替えをしたことなど、その時に撮った写真を見せてくれながら話をしてくれました。15分ほど話をした後、トレーニング登山開始となりました。スキー場の中を抜けて、白根沢沿いを進み、かつてここで遭難した登山

者を悼む碑の所まで来るといよいよ急登の始まりです。アイゼンをはき、ゆっくりと、一步一步登っていきます。何日か前についたであろうトレースが残っていたので外山の尾根まではそれに沿って登っていきます。2時間半ほどで尾根に出ると、新雪が降り積もっており、外山への急登には付いていたトレースは殆ど消えていました。しばらくは、アイゼンのまま歩いていきましたが、新雪が深く歩行が非常に厳しくなってきたのでアイゼンの上からワカンを履きました。それでもひざぐらいまで没してしまい、天狗平を経て前白根山まではかなりきついラッセルでした。前白根山頂は快晴で眺めもよかったです。強風だったので、早々に五色沼避難小屋に向かいました。午後1時半避難小屋に着き小休止の後、荷物を置き、水場のある五色沼まで行ってみると、一面の氷。水場を探し当てることもできずに結局は更なるラッセル

の訓練となってしまいました。持ったつもりの行動食のパンを忘れてしまったために、翌日の行動食が足りなくなるのではという不安な気持ちを持ちつつ、小屋で簡単な食事を済ませました。ウィークデイということもあり今日はまず登ってくる人はいないだろうと本を読んでみると、暗くなりかけた午後4時半頃に男性の二人連れが到着しました。一言二言の挨拶をした後、小生はそのまま本を読みつづけているとその二人連れは食事の支度を始めました。こちらの行動食の残量の不安など露知らず、アルコールとキムチ鍋という豪華な食事のようでした。腹が減ったな、などと考えているといつのまにか眠ってしまったようでした。

翌日は5時半に起床し、6時45分に奥白根山へと歩き出しました。前日の後半同様トレースは見当たらず、赤布等も所々消失していて森林限界まではかなりきついラッセルでした。森林限界を超えると強風のため積雪はあまりなく急登そのものはきつかったものの快晴の中、快適な歩行となりました。9時に奥白根山頂に到着し、相変わらずの強風とその後の行程を考えるとのんびりもしてもらえず、10分ほどで山頂を後にして、登って来たのとは逆側の弥陀カ池に向かって歩を進めました。弥陀カ池湖畔の菅沼新道との分岐からは全くトレースがなく五色山頂上まではまたまた厳しいアップダウンが続きました。かなり疲労を感じてい

るなか、山腹を悠々と走るシカがいて、何と軽やかなことよ、とうらやましい限りでした。

五色沼山頂からはすべて下りという安堵感からか気持ちにも若干余裕ができ、かなたに見える湯元を目指しました。しばらくすると今回の山行中初めて登山者とすれ違いました。すでに午後の時間帯になっており、どこまで行くのだろうか、と考えながら更に歩を進めていると、今度は冬山合宿中と思われる高校生らしき10人ぐらいのグループに遭遇。自らの背中の大きさをはるかに上回るサイズのザックを背負い訓練に励んでいる様子でした。高度が低くなってくると中曽根尾根は北側のため氷化している部分が多く、何度目かのアイゼンをつけ慎重に（一年前の初冬の山行では何度か転んだので）歩きつづけました。

午後3時、水も尽きたところでうまく湯元の駐車場に到着。正月山行に向けてのトレーニングにはまずまずの歩行時間かと考えながら、帰り支度をし、1日早いクリスマスパーティのある我が家へ向かう帰路につきました。

（佐野 記）

ハヶ岳・ジョウゴ沢&裏同心ルンゼ

2000. 12. 23~24

パーティ L本図一統、松井裕史、吉田仁

X'masが近づいてくると、どうも落ち着きがなくなってくる。別に彼女とLOVE&LOVEで、熱々したい訳じゃない。キンキンでガシガシしたくなってくるからだ。そうですICEのシーズンが、やって来たのです。X'masは、どのようにして過ごすか？彼女とデートしてレストランで飯喰ってSOXして寝るか、それとも鼻水たらしながら、氷にバイルぶち込んで、しこたま小指打ち付けたりして（下手だから）手足の感覚がなくなる程寒い思いをするか。もちろん鼻水タラタラの方を選ぶでしょう。そんな男が3人集まり、本図隊長、Dr松井、jinでハヶ岳に向かった。今シーズンからアイゼンを新調したので、早く使ってみたくて、ウズウズする。松井さんなんて、BDのcobraにcharlet, GRIVEL RANBO, BEAL ICE LINEを、買い揃えての登場だ！。ちなみに婚約者は、スッチーだって。こりゃ〜今回は、ちょっとくらい悪い思いをしてもらわないと腹の虫がおさまらねー（冗談です、松井さん！）まったくうらやましい限りです。小淵沢で高速を下り

ると-5℃、さすがに寒い。美濃戸までの林道は、凍ったわだちになっていて何度かオデッセイの腹を打ちながら3時間半で順調に到着。初日は、あまりがつつかず朝はゆっくり起きて鉱泉にベースを張り、お茶を飲んで昼ごろにジョウゴ沢に向かった。時間も時間なので空いていると思いきやF1は、相変わらずデパートのバーゲン状態。TRで練習してるパーティで一杯だ。松井さんがICEは初めてなので、一通りのテクを本図隊長から受けて早速沢をつめることにする。F1は、ICEボルダーだけど念のためロープを出して隊長が行く。すぐ上のF1-15は、オレがリード。スクリー打ちの練習もかねて1本打って行く。その先は、いくつかの段差程度の滝を越えて25Mの大滝に到着。しかしここで時間切れとなり、同ルート下降で、鉱泉に戻った。

夜は風が強く吹雪いたけど、朝には回復してCLIMBING日和！裏同心に入る。昨日のジョウゴ沢に続きこちら人も、人、人ばっか。せっかくのX'masなんだから家でケーキでも喰ってればいいのに。

バカ正直に待っててもしょうがないので、適当なところから隊長が登り出す。さすが百戦錬磨の隊長、人とロープを蹴散らしてどんどん突き進んで行っちゃった。凄いですが、ボクには出来ません。ビレイしていると、このクソ混んでる時に、上からロープDOWNなんて叫んでる。無視、無視！下の状況分かってんだから、少しは考えろよ。OKコールが来たので登り出す。傾斜はゆるいので快調に登る。次の滝は、オレがリード、あまり効いて無さそうなスクリュを1本打ち、のっ越してビレイ。その先もう1ピッチロープをのばして終了。大同心の下を通して天場に戻った。今回は、お手頃ルートって事もあると思うけど若い女の子も何人

かいたりしてみんな頑張ってた。シェイナードいわく、『道具がこれだけ進歩してしまい、いきなり垂直がリード出来てしまう今、I C Eの時代は、終わった』と言っているけど、へなちょこクライマーのオレにとっては、願ったり、かなったり。いい時代に生まれたな～。

(吉田 記)



どうしてこんな枝が出来るの？縁結びの木かな？？

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO.182 2000.7. B5 44P 浦和浪漫山岳会

妙義・星穴沢～金洞沢左俣～金洞山～有馬山～小山沢、奥秩父・雁坂峠、0B山菜山行ほか

◎Rohman NO.183 2000.8. B5 32P 浦和浪漫山岳会

鹿沼の岩場岩トレ、春の集中・南会津・浅草岳、御神楽岳ほか

◎Rohman NO.184 2000.9. B5 50P 浦和浪漫山岳会

夏合宿・会津朝日岳北面の沢、白戸沢流域を4パーティで廻行、四国・剣山、飯豊・北股岳ほか

◎Rohman NO.185 2000.10. B5 38P 浦和浪漫山岳会

川内・静川、黒部・東沢谷～水晶岳～赤牛岳～奥黒部ヒュッテ、上越・米子沢～上トトンボ沢～ブサノウラ沢、檜保川ススケ沢、南会津・白戸川メルガ股沢～丸山岳～大幽東ノ沢ほか

◎Rohman NO.186 2000.11. B5 90P 浦和浪漫山岳会

川内・岩塔ルンゼ、飯豊・梅花皮小屋～御西岳、北ア・烏帽子岳～船窪岳～蓮華岳～針ノ木岳、南会津・黒谷川東実入沢本流中俣左沢～袖沢魚止沢～御神楽沢～会津駒ヶ岳～檜枝岐、川内・室谷川西の沢～裏の山高菅スラブ～裏の山～小又川東又沢～大川、八幡平・大深沢飯戸沢～関東沢左俣～右俣～東の沢～大深岳～松川温泉、秋の集中・末丈方岳に4パーティに別れて沢から集中する、ほか

◎Rohman NO.187 2000.12. B5 30P 浦和浪漫山岳会

奥利根・湖岸道探検、日光・狸窪～半月峠～阿世湯峠～杜山～黒松岳～千手ヶ浜～宿堂坊山、上越・蓬峠～武能岳、南会津紀行・湯野上温泉と赤土峠ほか

◎わらじ NO.532 2000.7 B5 18P わらじの仲間

春の集中・雁坂峠集中・7パーティで廻行、フリークライミング通信ほか

◎わらじ NO.533 2000.8 B5 16P わらじの仲間

谷川岳・2ノ沢右壁、万太郎谷オタキノ沢、フリークライミング通信、事故報告(御神楽岳広谷川湯沢三角スラブ)ほか

◎わらじ NO.534 2000.9 B5 24P わらじの仲間

夏合宿飯豊・7パーティで廻行、フリークライミング通信ほか

◎わらじ NO.535 2000.10 B5 18P わらじの仲間

秋の集中・毛猛百字ヶ岳5パーティ、ヨセミテほか

◎わらじ NO.536 2000.11 B5 18P わらじの仲間

秋の集中の記録の一部、ヨセミテ、台湾・濁水溪、馬海僕溪ほか

◎わらじ NO.537 2000.12 B5 18P わらじの仲間

森吉山、前穂高北尾根、船形山大倉川笹木沢、頸城・真川裏金山谷、越後・登川金山沢、水無金山真沢蔵川～中ノ岳～八海山～屏風道、二岐川平ヶ岳先ノ沢ほか

◎逍遙 NO.110 2000.7 B5 18P 逍遙溪稜会

奥秩父・大常木谷、竜喰谷、荒川入川真ノ沢、大菩薩・滝子沢、奥多摩・入川谷、朝日・白滝沢金山沢ほか

◎逍遙 NO.111 2000.8 B5 14P 逍遙溪稜会

奥多摩・水根沢、丹波川本流、大菩薩・鶴川尾名手川中ノ沢、奥多摩・大雲取谷、谷川・高倉沢、二口・大行沢ほか

◎逍遙 NO.112 2000.9 B5 40P 逍遙溪稜会

夏合宿朝日・3パーティで廻行、奥秩父・荒川谷金山沢、早池峰・猿ヶ石川七郎沢、奥利根・八木沢川西メーグリ沢～宝川板幽沢、上越・三国川黒又沢五竜沢、奥多摩・逆川、奥日光・外山沢～庵沢ほか

◎逍遙 NO.113 2000.10 B5 20P 逍遙溪稜会

上信越・魚野川、奥利根・矢木沢本流、谷川・赤谷川笹穴沢、飯豊・松山沢カゴノ沢、焼石・南本内川ほか

◎逍遙 NO.114 2000.11 B5 20P 逍遙溪稜会

秋の集中・八幡平3パーティ、谷川・湯松曾川大倉沢～湯ノ沢、南会津・東黒沢丸山沢、栗駒山・産女川ほか

◎逍遙 NO.115 2000.12 B5 18P 逍遙溪稜会

南ア・明神谷、丹沢・本谷川四町四反ノ沢、早戸川原小屋沢ほか

- ◎Next! NO.55 2000.7 B5 8P 山岳溪流釣り集団むげん
仲間の近況報告ほか
- ◎Next! NO.55 2000.8 B5 26P 山岳溪流釣り集団むげん
奥秩父・滝川・槇ノ沢古礼沢、八百谷ブドウ沢、中津川大滑沢～入川矢竹沢、谷川・東黒沢～宝川～ナルミズ沢
ほか
- ◎Next! NO.57 2000.9 B5 16P 山岳溪流釣り集団むげん
焼石・胆沢川本流～スギヤチ沢・焼石沼ほか
- ◎Next! NO.58 2000.10 B5 16P 山岳溪流釣り集団むげん
神通川・熊野川、ナルミズ沢ほか
- ◎Next! NO.59 2000.11 B5 14P 山岳溪流釣り集団むげん
仲間の近況報告ほか
- ◎Next! NO.60 2000.12 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん
仲間の近況報告ほか
- ◎とまのかぜ NO.92 2000.7 B5 46P 童人トマの風
立山、二口・大行沢樋ノ沢～カケス沢右俣、奥秩父・谷津川本流、二口・二口沢鳴虫沢、摺上川周辺、7パーティ
で遡行、栗子・阿武隈川小川横川、八甲田・逆川、丹沢・大滝沢本流、鹿島槍ヶ岳東尾根、丹沢・火打沢ほか
- ◎とまのかぜ NO.93 2000.8 B5 47P 童人トマの風
御坂・芦川横川、森吉山ノロ川桃洞沢～赤水沢、鹿島槍ヶ岳、日光・野門沢、上信・清津川サゴイ沢、阿武隈・
背戸蛾廊、谷川岳・檜又沢大スラブ、南ア・栗代川、飯豊・新谷川岩岳沢、丹沢・勘七ノ沢、小川谷廊下、飯豊
縦走、奥多摩・大常木谷、東北・夏油川マンダ沢、日光・柳沢本流右俣～左俣、足尾・庚申川本流、奥多摩・逆川
ほか
- ◎とまのかぜ NO.94 2000. B5 36P 童人トマの風
谷川・白毛門沢、奥秩父・豆焼沢、中ア・片桐松川本谷、笛吹川ホラの貝ゴルジュ、朝日・三面川末松川～岩
井俣沢、枳形川フスベ沢～西俣沢クラシ沢～岩魚沢、奥秩父・丹波川本流、朝日・金目川本流左俣、栗駒山裏
沢ドゾウ沢、谷川・ヒッゴー沢、摺上川小川西川～南沢ほか
- ◎とまのかぜ NO.95 2000.10 B5 40P 童人トマの風
谷川・万太郎谷オオベタテ沢右俣、大雪・クワウンナイ川、谷川・南カドナミ沢、朝日・見附川オバラメキ
沢、入りトウヌシ沢、高松沢、栗子・烏川滑谷沢、越後・三国川丹後沢左俣、夏油川ウシロ沢ほか
- ◎とまのかぜ NO.96 2000.11 B5 47P 童人トマの風
霧来沢古滝沢～大鍋俣沢左俣、霧来沢集中8パーティ、秋田・丸舞北又沢～籠滝沢鬼子沢、谷川・湯松曾川白
樺沢、湯ノ沢、虎毛、赤湯又沢、越後・大白沢キノクラ沢～恋ノ岐川、栗駒・一迫川大地沢、谷川・天神山南
面の沢、奥秩父・笛吹川東沢釜の沢西俣ほか
- ◎とまのかぜ NO.97 2000.12 B5 20P 童人トマの風
脊梁・丸山～勢至堂峠、南会津・男女川、霧来集中の記録の一部ほか
- ◎山紫水明 NO.63 2000.7 B5 23P 山旅の会
奥多摩・倉沢谷長尾谷、十二ヶ岳岩トレ、ベルギー釣りほか
- ◎山紫水明 NO.64 2000.8 B5 14P 山旅の会
奥多摩・南秋川矢沢軍刀利沢、丹波川徒渉訓練、奥秩父・青岩谷、丁山塊・丁川丁沢左俣ほか
- ◎山紫水明 NO.65 2000.9 B5 10P 山旅の会
奥多摩・大雲取谷、東北・葛根田川ほか
- ◎山紫水明 NO.66 2000.10 B5 12P 山旅の会
丹沢・小川谷、丁・丁川右俣左沢、山形・野川ほか
- ◎山紫水明 NO.67 2000.11 B5 10P 山旅の会
ベルギー釣り、米子沢、武尊沢ほか
- ◎山紫水明 NO.68 2000.12 B5 6P 山旅の会
武尊沢ほか
- ◎すずらん通信 NO.232 2000.7 B5 12P 鈴蘭山の会
奥鬼怒・大岩沢、丹波川小常木谷、丹沢・原小屋沢ほか

◎すずらん通信 NO.233 2000.8 B5 16P 鈴蘭山の会

御坂・芦川濁沢、苗場・清津川サゴイ沢、南ア・大井川明神谷～アザミ沢～西河内、吾妻・中津川、和賀・夏瀬温泉～堀内沢～辰巳又沢～マンダノ沢～朝日岳～朝日沢～堀内沢ほか

◎すずらん通信 NO.234 2000.9 B5 22P 鈴蘭山の会

奥秩父・ヌク沢左俣、飯豊・内ノ倉川七滝沢、丹沢・早戸川原小屋沢、飯豊・実川本流～上追流沢、北ア・金木戸川小倉沢、会越・御神楽沢、東北・葛根田川～関東沢、南ア・易老沢左俣～光岳～右俣、奥多摩・海沢、檜枝岐・実川硫黄沢、只見・恋の岐川ほか

◎すずらん通信 NO.235 2000.10 B5 16P 鈴蘭山の会

吾妻・中津川、湯掛曾川大倉沢～湯ノ沢、飯豊・頼母木川上ノ小俣沢、頸城・真川裏金山沢～金山沢、三滝沢～赤湯又沢～戸沢～虎毛沢～湯ノ又沢ほか

◎すずらん通信 NO.236 2000.11 B5 14P 鈴蘭山の会

谷川・茂倉谷、南ア・扇沢、谷川・東黒沢～ナルミズ沢、松又谷二ノ沢、奥秩父・笛吹川ホラの貝沢左俣ほか

◎すずらん通信 NO.237 2000.12 B5 10P 鈴蘭山の会

救助訓練、雪上訓練ほか

◎渓遊 NO.111 2000.7 B5 8P 渓遊会

北摂・武庫川大峰山西ノ谷、奥美濃・釈迦嶺山菜採り、大峰・弥山川双門滝、北ア・唐松岳～五竜岳、湖北・葛龍尾崎半周ほか

◎渓遊 NO.112 2000.9 B5 10P 渓遊会

裏六甲・丹生山塊柏尾谷、台高・蓮川中の谷、越前・足羽川シモットノ谷、鈴鹿・愛知川神崎川本流、布引・神武谷川柳谷、北播・福知川杉岡谷、台高・本沢川黒倉又谷、井光川笹ノ谷、本沢川白倉又谷、蓮川千石谷ほか

◎渓遊 NO.113 2000.10 B5 10P 渓遊会

大峰・芦の瀬川、丹波・葛川堂ヶ谷、南ア・易老岳、光岳、上信越・清津川釜川右俣横沢左沢～霧の塔、台高・中奥川赤倉谷、奥美濃・前谷川～大日岳、湖北・葛龍尾崎、福知川本流ゴルジュほか

会報

◎ADVENTURE forum NO.4 2000.11 A4 8P 植村記念財団

インタビュー野口健に聞くほか

◎あをい NO.46 2000.2 B5 55P 水戸葵山岳会

1996年から1999年までの記録、96年春山合宿・黒部丸山中央山稜、冬山合宿・西尾地尾根、97年春山合宿・鎌尾根～鹿島槍ヶ岳、東尾根～鹿島槍ヶ岳、夏山合宿・白馬岳～朝日ヶ岳、冬山合宿・塩見岳～仙丈岳、三峰川岳沢、98年冬山合宿・小窓尾根～剣岳、蝶ヶ岳、2000年春山合宿・岳沢～穂高岳、前穂高岳、冬山合宿・明神～霞沢岳、個人山行ではメキシコ・イスタシワトル、谷川・幽の沢中央壁左フェース、白神山地など13本、その他山スキーの記録やエッセイなど7本ほか

◎すずらん NO.21 2000.9 B5 148P 鈴蘭山の会

沢登りの記録では南ア・赤石川大雪沢、飯豊・胎内川東俣川坂上坂上左沢、北ア・北ノ俣川～赤木沢、越後・佐梨川大チョーナ沢など10本、集中沢登りでは巻機山・五十沢中の滝沢、下の滝沢など5本、山スキーでは頸城・三田原山、越後・守門岳西面、白山・野伏ヶ岳、大笠山、飯豊・飯豊山、北ア・蓮華岳大沢右俣など11本、縦走登攀では帝釈・奥鬼怒湿原～黒岩山～帝釈山、谷川・一ノ倉沢烏帽子奥壁凹状ルートなど6本、コラム3本、1999年度山行一覧ほか

◎とまのかぜ NO.7 2000.9 B5 326P 童人トマの風

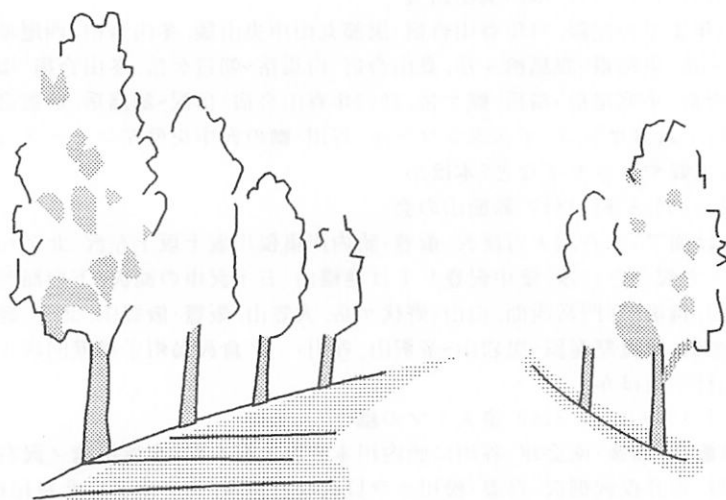
無雪期の山では飯豊・越後・南会津・谷川に胎内川本流坂上沢右俣、水無川滝ノ沢右俣、一ノ倉沢南稜など30本、東北に朝日・岩井俣沢畑沢、吾妻・松川ホラ貝沢など17本、北ア南アに北鎌尾根、大井川信濃俣河内など7本、関東中部以西に二子山中央稜、房総・キンダン川、西表・仲良川～西田川など25本、雪の山では越後・南会津・谷川に武能岳西尾根、山毛驢沢山～窓明山スキーなど13本、東北では南八甲田横岳山スキーなど5本、ハヶ岳・アルプスでは広河原沢3ルンゼ、白馬岳主稜、尾白川下流部など14本、関東では南牧川3段の滝など9本、その他・エッセイ、コラムほか

◎年報わらじ NO.23 2000.12 B5 222P わらじの仲間

冬合宿・剣岳黒部別山南尾根～三の窓尾根～剣岳など4本、夏合宿・大石川東俣川大沢、実川裏川矢沢など7

本, 春の集中・会越笠倉山10本, 秋の集中・越後荒沢岳5本, 冬の集中・谷川武能岳3本, 地域別山行報告・北海道東北では日高・トヨニ川左俣沢・トヨニ岳, 朝日連峰・葉山山スキー, 吾妻・中津川など17本, 会越・川内・南会津・那須では杉川本流, 会越・鬼ヶ面山マンモス尾根など13本, 越後では金城山つばくろ岩ダイレクトスラブ右俣右稜など11本, 上信越では一ノ倉沢中央稜, ヒツゴー沢, 奥利根・檜俣川本流・赤倉山・オミキスズ沢など20本, 東京近郊では丹沢・モチコシ沢など12本, 北アルプス・頸城では穴毛谷二ノ沢中ノ左俣中央ルンゼ・四ノ沢Aルンゼ, 能生川イカズ谷など12本, ハヶ岳・南アルプス・中央アルプスでは北岳バットレスピラミッドフェース・Dガリー奥壁・四尾根など9本, 関西では白山・境川ボージョ谷・加須良川など7本, 海外ではチベット・チョムカンリなど3本, 1999年山行一覧ほか

以上閲覧したい方は本図まで



編集後記

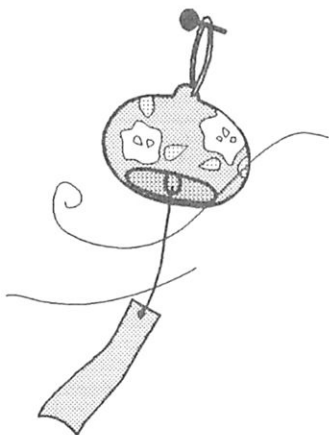
子供の頃、テレビマンガやSFにあった通信機。いわゆる『流星号！、流星号！応答せよ！』とか『飛べ！ジャイアントロボ』といった携帯の通信装置。子供の頃は、すごく憧れていた物で有る。しかし、今21世紀には携帯電話として爆発的に浸透して、小学生まで持っている。今、現在では山行には携帯電話は欠かせなくなっている。もしもの事故の際の緊急連絡手段として、あるいはパーティ間の連絡にと以前の無線機にとって変わる勢いである。まあ、山域に入ってしまうとまだ無線機が必要ですが、私の知り合いが、単独で山に登っていて転落し救助依頼を携帯で行ない、救助してもらったと言うことを聞きました。確かに大変便利にな物です。

冗談で、登攀中にルートが分からなかったり、アドバイスを聞きたい時に携帯で先輩達に電話をかけ『Mさん、このルートは上で右に行くんですか？、それとも左。』とか、『ここから下降するには』とか聞いて登ったりしてネ。今は携帯でメールも出来るし便利になったものです。

子供の頃、憧れていた物をいつの間にか使っている自分が何か不思議に思えてきます。ただ、余りにも便利に成るのはいいのですが、その影で何か大切なものが、無くなってくるんじゃないかという危機感も拭えない気がします。何か短略的に時代が変わってきてしまっているんじゃないかという思いが……？。

でもやっぱり便利なものは使わなきゃ損ですかね……………。

(編集長)



季報[R&V]第38・39合併号 発行2000年 夏・秋

発行者：本図一統

発行所：ACC-J茨城 〒306-0501 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男方

編集者：生井一男

印刷所：やさど印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団